未完の物語――「絵入自由新聞」の連載記事（続き物）（一）

山田俊治

「絵入自由新聞」は、一八八二（明治一五）年九月一日に、京橋区銀座三丁目の絵入自由新聞社より創刊された。創刊号巻頭の社説には「人権を重んず可き所以を悟りたる者は仏蘭合衆国および社会党の人民のみ」とする、社友桜田百華園（百衛）の論説「絵入自由新聞此不自由社会に産る」を掲載する。しかし、翌日から発行停止となり、解停されたのは一〇月六日であった。編集兼印刷長久野初太郎が今井藤次郎に交替して続刊されるが、一一月一日から一八日にも発行停止に遭い、以後は順調に継続刊行されることになった。

創刊号の雑報欄は、一面から二面にかけて渡辺文京「吹雪の花笠」を掲載、二面は二段抜きで上野戦争での対決を描く芳年の挿絵を載せ、三面に掲載の宮崎夢柳「冤枉の鞭笞」も、専制の犠牲となった死屍累々たる野辺を描く芳年の挿絵を二段抜きで載せるという紙面編成になっていた。これらの挿絵付きの続き物は、他の記事とは異なり、小説的な読み物であって、それらの連載によって新聞の継続的な購読を促すことが期待されていたことが推測できる。この虚構的な連載記事を視覚化して読者を迎える紙面編成は、以後の政党系小新聞の範型になったといえる。

と同時に、それらの小説的な連載記事は、出版社にとっても見逃せない娯楽読物の素材であった。「吹雪の花笠」は、吉田正太郎編『人情美談吹雪の花笠』という活版草双紙として、翌年六月に自由閣・秩山堂から出版され、「冤枉の鞭笞」も、内藤久人編輯『魯西国虚無党冤枉の鞭笞』というボール表紙本で、一二月四日に駸々堂本店から出版されるのであった。新聞記事は版権を登録しなかったために、これらの編者はそれぞれの出版人であった。「絵入自由新聞」

は、この小説的な記事を継続的に連載して紙面を賑わすとともに、出版社を潤していくことになるのである。

以下のリストは、創刊から一八八三（明治一六）年一二月までの、雑報欄を中心とした連載記事を一覧化したものだが、これまでと同様に編集体制の変遷、他社の動向や出版状況に関わる雑報も、注記の形で引用してある。そのリストからも継続的に連載された小説的な続き物が、書物として出版されていく様相を窺うことができるだろう。

一二月から連載された「合鏡心妍醜」全四八回は、和田篤次郎編輯『合鏡心妍醜』という活版草双紙で、翌年の六月二五日に春陽堂から出版され、[1] 翌一八八三年二月から連載された「袖の露」全二一回は、花笠文京・一魁斎芳年画『十年一夢袖の露』という活版草双紙で、その九月二六日に東台館・鶴声社から出版されていた。同じ二月から連載された「浜松風」全六四回は、『駿甲侠客浜の松風』という活版草双紙として連載終了後の五月一〇日に、直ちに鶴声社から出版されたのである。『十年一夢袖の露』が、著者名を冠しているのに対して、他はいずれも出版社主導の刊行物であった。

九月発行の『十年一夢袖の露』が著者名を冠した理由は、七月に創業した絵入自由出版社との関係を推測できるだろう。五月から連載された「高峯の荒鷲」全五六回を最初の書目に入れた絵入自由出版社は、以後の「絵入自由新聞」掲載の続き物を、著者名を冠した活版草双紙として陸続と出版していたからである。宮崎夢柳著・大蘇芳年画『勤王済民高峰之荒鷲』前編は七月一七日御届、後編は九月一〇日に出版され、それぞれ雑報欄で広告されるのであった。同じく五月に連載開始された「湖水の口碑」全六二回は、花笠文京『浜の松風拾遺湖水の口碑』という活版草双紙として、上編を九月一二日、中編を一〇月二〇日、下編を一〇月三〇日に出版されていた。八月から連載された「夏野の刺草」全九三段は、花笠文京『開明新説聖代の球謡』前後編と改題されて、一二月中に絵入自由出版社によって活版草双紙になった。しかし、それ以前に『咲分夏野の刺草』という連載時の表題で、編輯兼出版人を高橋伝吉として

一〇月一〇日に出版された活版草双紙もあった。

この出版物を踏まえたものかは不明だが、一〇月一四日の雑報は、「道徳の頽廃」という見出しの下に「近来出来星の書肆傍訓新聞に掲載したる珍談奇話の世に持囃さるゝを奇貨として文を剽（ぬす）み画を取り利慾に眼闇黒の恥輝しく記者画工に其過誤の訂正も請はず世に公けにせらるゝは実に難有迷惑恐縮の至にて苦々しき次第なり元来板権のなきものなれば誰人に出板されたとて決して彼是言ふべき理なきは法律も問はざる処なるゆゑどうでも宜とは言ものゝ一応の断り位はあつてもよさうなものだと愚痴を飜（こぼ）すもたはい〳〵」とする記事を掲載していた。そこには、小説的な連載記事の出版を自社が独占できない状況に対する不満を見出せるだろう。新聞記事自体が事実と虚構を弁別しない紙面を作り出していたのだが、自社の出版部を持つことで、報道と出版の分割線を想定せざるを得なくなったということである。こうした新聞記事の権利を意識することで、報道と出版の蜜月は徐々に崩壊していくことになるだろう。

しかし、「絵入自由新聞」は自社の連載した小説的な連載記事を、積極的に絵入自由出版社より活版草双紙として出版していくのだった。九月から連載された「五月雨日記」全五九冊は、花笠文京『赤縄奇累五月雨日記』として一二月一〇日に出版し、一一月に連載開始された「枯野の田鶴」全八五回は、花笠文京『枯野の田鶴』として翌年四月に出版し、一二月から連載の「襤褸の錦繡」全九一回も、花笠文京『復讐美談襤褸の錦繡』として翌年五月一日に出版されていくのだった。そして、絵入自由出版社の活動は、一八八五年一月以後には見出せなくなるのである。(2)

注1　リストにもある『絵入自由新話』巻一～四（一八八二・二・二六御届）には、「吹雪の花笠」（巻三まで）「合鏡心の妍醜」及び、巻一、巻二に「ガーネット、ウオルスレーの伝」が収録されている。

2　松原真「二世花笠文京―近代小説誕生期の文学活動について」（二〇一〇・九「日本文学」）を参照。

一八八二（明治一五）年

＊9月1日　論説に「絵入自由新聞此の不自由社会に産る　百華園手稿」を掲載して、東京京橋区銀座三丁目二拾番地の絵入自由新聞社より創刊。四段組。「論説」「雑報」「官令」「広告」の欄構成。編集兼印刷長　久野初太郎。

9月1日～12月28日　文京綴「吹雪の花笠」全二三回　＊雑報欄に別行見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。12月28日末尾に「記者云す本回は四五回に渉る長物語なれど記事の都合あるを以て一回に書縮めたればお読悪き処ろも嘸あらんが偏にお見宥しを願ふのみ」と付言される。

9月1日～10月28日　夢柳稿「冤枉の鞭笞」全一四回　＊雑報欄に別行見出し、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。10月28日末尾に「夢柳付けて言ふ此の物語の中に骨子なる烈女ヴエラサシユリツチは彼の臨時裁判所に於てアレキサンドロフに助け救くはれ傍聴人に奪ひ去られて行衛知れずなりし後近頃英吉利にて見かけたる人ありとのことなれども固より確かならねば委しきことを記すに由なし看客其記事の自づと団円ざるを咎め給ひそ」と付言される。

＊9月1日　「社告」　「本社絵入自由新聞いよ〳〵本日を初刊とし日々発行仕候ゆえ唐突ながら同主義の訳を以て隣家なる自由新聞購読の諸君へ一葉進呈仕候に付御婦人お児達へ御披露の上御愛顧の程奉願候」

＊9月2日～10月5日まで発行停止。

10月6日～10月10日　「恋は曲漢」全四回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵付きで連載。

＊10月6日　「雑報」　「解停の御披露　弊社絵入自由新聞去月一日初めて第一号を発するや否や忽ちその筋より凛乎たる停止の御達を被り記者は固より社員一同恐縮千万恰も万木の雪霜に凋むが如く悲涼寂寞五週日の久

しきを経て今日に至り漸く解停の恩波に浴するを得いづれも蘇生の思ひをなせり将さに益す〳〵自由の春風を鼓動せんとす世上の諸君願くは記者が筆に花なきをお見捨なく続いて芳読あらんことを」

＊10月6日　「投書」「絵入自由新聞の発行を祝す　猫々堂人魯叟／我人天賦の自由あり。有と雖も自由も又。権限憲を超る者は。所謂手前勝手の自由にして。真の自由と云可からず。如此微妙の理を得る。尤も難しとすべけんや。即ち本日発行の新聞紙。題して絵入自由と号す。夫有声の話に無声の画を添へ。加るに。傍訓を以てする事。世の童蒙婦幼をして。開智自由を導くの一端とし。記者も亦。勉て自由の談を綴り。画工相併びて。運筆を自在にす。自由の理。一朝解し難きも。路次の栞の絵入新聞。且傍訓の案内に付。麓の道の険、岨からぬを。徐ろに経て喜馬拉山の。頂上に至らんこと。当新聞の順序に全し。故に我人天賦の自由は。総て紙上に含蓄せん歟。実に此発行の開業たるや。国花正に盛んなるの。前兆を示すに足れり。喝采々々」

＊10月6日　編集兼印刷長　今井藤次郎となる。

＊10月7日　「雑報」　「謝告　一昨日解停の恩命を蒙むるや時已に午後五時に垂々としそれより急ぎ編輯其他の社務に従事し倉卒の際校正も殊の外疎漏に渉り誤字脱字等少なからず何とも恐縮の至り爾来はかゝる誤脱なきやうに念に念を入れますれば今度の処は幾重にもお見宥しの程偏へに願ひあげまする」

「東京絵入新聞　昨日の同新聞に神田明神社内にて開きし車会党懇親会の景況なるべし鉄道馬車会社より神田神社へ神酒十駄を奉納した余瀝を参詣の者へ飲せたゆゑ其近辺に下等生酔がひよろついて居た云々を記載したので車会党はハツタと怒り咄汝絵入よくも讒誣の筆を舞し吾党の栄誉を毀損せしこと奇怪なれ吾党の為には商売忌敵たる彼鉄道馬車会社の振舞酒を如何に咽がぐびつき胸に虫唾が走ればとて一滴たりとも呑むべきや一寸の虫にも五分の魂しひ知らずや車夫にも剛の者あり此儘には捨おきがたしと同会の会主世話人三名が

惣代となり絵入新聞社へ押掛け日韓の関掛も啻ならざる大談判を開きし由和戦何れに決するや二つに一つの結局如何に尚委しくは知れしだい」

＊10月8日　「提灯持　芝露月町の　錦堂より西河通徹氏飜訳の露国虚無党事情と題せる該党の起りし原因及び変遷勢力目的等より露国政府が該党派に対するの政略まで訳述したる志士必読の良書を発兒せり又松村操氏直訳通俗水滸後伝巻の一を南鍋町の兎屋より出板是は小説家の六韜三略」

10月10～20日　「猫々奇聞」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

10月10、13日　「悪婦」　＊雑報欄にかぶせ見出し。13日は「悪婦おりわの話し」と題される。

10月11～19日　「黒蛸の汚話し」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、14、15日は芳年、年参の挿絵付きで連載。

10月11～13日　「奸人災禍に遇ふ」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し。10月26日広告欄に、事実無根とする広告を掲載。

10月12～20日　夢柳稿「労力社会の諸君につぐ」全三回　＊論説欄に別行見出しで連載。

10月13～21日　「知力と腕力の間に中裁を試む」全三回　＊論説欄に別行見出しで連載。

10月13、14日　「女子の浅墓」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

10月14、15日　「男一人に女房二人」　＊雑報欄にかぶせ見出し、15日は芳宗の挿絵付き。

10月14、15日　「老て益〳〵壮なり」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

10月15、18日　「大欲は無欲に似たり」　＊雑報欄にかぶせ見出し、18日は芳宗の挿絵付き。

＊10月15日　「雑報」　「新聞禁止　今月一日第一号を発刊されし信州松本の東山自由新聞は去る十二日其筋より発行禁止を命ぜられたり」

＊10月18日　「雑報」　「朋友皆懇会　予て前号にも記せし如く去る十五日は有喜世社の当世男橋塘柳香両哥兄が会主となり両国薬研堀の常磐楼にて開かれたる第三期朋友皆懇会の景況を略記せんに来会する者無慮六十余名鯰泥鰌猫狸落語家公事師医師講釈師新聞記者は申すに及ばず絵師商人文人墨客雅俗混淆何でもござれ仁義釈教恋無常酒あり脊あり芸妓あり演説あり変舌ありお饒舌あり無口ありステ、コあり茶番あり祝文あり誤詫あり種々薩多の面白遊び面黒狸の腹さん〴〵飲みや謡へや大陽気礼に始まり乱に終らず午後八時頃めでたく散会久し振にて弊社の文京も頗ぶる頂戴大酩酊委しく記載したけれど前後忘却たはい〳〵」

「古澤滋君　同君は先きに自由新聞社へ聘せられその主幹の名を署せられしが本日よりいよ〳〵社説の筆を執らるゝと云ふ」

10月18～20日　「懺悔物語」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、年参の挿絵付きで連載。

10月18、20日　「ちん〳〵珍聞」　＊雑報欄にかぶせ見出し、20日は芳宗の挿絵付き。

10月21、22日　「己れの罪己れを責む」　＊雑報欄にかぶせ見出し、21日は芳宗の挿絵付き。

10月21、22日　「色は思按の外」　＊雑報欄にかぶせ見出し、両日年参の挿絵付き。22日「おとわ信兼の痴談」と題される。

10月21～24日　「ポン引」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、22、24日は芳宗の挿絵付きで連載。

＊10月22日　「雑報」　「花柳稗史　弊社の文京が夜延操觚の一夜漬吉原根津品川繁昌記と題し三花街の景況を穿ちて面白可笑く綴りたる世に珍らしき面黒稗史（とは手前味噌だか如何だか）を二三日中に昇龍堂から出板いたしますれば大方の通人雅客娯愛顧の程偏へに願ひ上ますと板元に代りて自分で自分の提灯持」

10月24日～12月22日　「有異転変」全九回　＊雑報欄にかぶせ見出し、25日、12月20、22日を除き、芳年、芳宗の

挿絵付きで連載。

10月25、26日　「天孝女に幸福を与ふ」　＊雑報欄にかぶせ見出し、両日芳宗の挿絵付き。26日「孝女お福の話説」と題される。

＊10月26日　「雑報」　「竹田交来　傭書家（はんしたがき）で有名なる武田交来（別号三閑人）は久しく病気の処去る廿二日黄泉の客となられたり子が父は四代目川柳の門人にて珍芽館高麗と云ふ狂句師なり子も又若冠にして此の道をたしむ（ママ）と雖も成らず後俳諧狂歌を詠み一時粋興連狂笑連杯云ふ群れに入りて三題ばなしに其名を得られたり書は故梅素玄魚翁の門にて出藍の誉れ高かりしも帰らぬ旅へ赴きしは最惜むべき事になん」

「新聞発行　尾張名古屋の名古屋新聞社より社名の如き新聞の第一号が発兒になりました」

10月27～29日　「おとわ信兼の後談」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵付きで連載。

10月29、31日　「民権家の最も恐るべきものは何歟」　＊論説欄に別行見出し。発禁で後稿はなし。

＊10月29日　「雑報」　「歌舞伎新報　同紙の編輯人久保田彦作氏は一昨日の有喜世新聞に何かよくない事のある様に冒頭だけ掲て居たが夫等の為でもありますまいが同氏は今度歌舞伎新報を退社されたる由また有喜世新聞も次号に掲すとの約束ゆゑよもやドロンの立消では有舞と思ひ外昨日の紙上に掲て居ないは紀事の都合で延引されたか早く跡が見たい者だと有喜世贔屓の新聞好が有喜世話しの風評とり〳〵」

10月31日～12月24日　「浮薄男児」全六回　＊雑報欄にかぶせ見出し、31日、12月19日、24日は芳年の挿絵付きで連載。

＊10月31日　「雑報」　「相撲新聞　歌舞伎新聞劇場新報（今はないが）其他坂地にも此類あつて劇場俳優は昔に勝る栄あれど相撲に限り御一新以来闘争を観せ物にするは如何にも野蛮の所為なりとて大いに衰微したるを

此道の者は深く歎き往古は禁中にも此事ありて礼式も正しく武家天下の頃に至りても力士と称し諸大名の抱へとなり帯刀までなしたる身分も今では却つて河原乞喰と云ひし俳優輩に劣る扱ひになさるるを残念に思ひ古式古礼を保護なし廃れたるを興すには新聞紙に若ものなしとて今度大坂府下に寄留する長野義弘と云ふものが願ひ出せし処この程許可になりしに付日ならず発行する由社長著名は東京の頭取高砂浦五郎にて此新聞は都て相撲に関したる古事雑報を記載すると云ふ」

＊11月1日～18日まで発行停止。

12月19日～2月21日　「合鏡心妍醜」全四八回　＊雑報欄に別行見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

12月19～26日　「孝子の薄命」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵付きで連載。

＊12月19日　「雑報」　「自由の犠牲　大坂よりの電報に拠れば去る十六日午後五時より同府久宝寺町一丁目第一楼上に開きたる忘年自由平権懇親会に於て発起人松木正守君（高知県人）は桜間要三郎と云へる者の為めに刺し殺されたりと同君は彼の地に在つて日頃自由平権の真理を拡充し専ぱら労力社会を鼓舞教誘し居られし事実より想像するときはその刺客たる蓋し反対党に出しならん乎猶後報を俟つて委しく報道すべし」

「三菱会社　従来三菱会社の内幕は素より蒸気船が沈没して客も荷物も滅茶〳〵になつた杯航海の渡世には有うちの失策話し等世間に対して格別恥にもならぬ事まで府下の改進党各新聞は勿論地方の新聞と雖ども嘗て一度も記載せざりしは全たく深き原因のあることにてそも〳〵同社は天下商法の利を一手に占め其勢力を逞ましふし世人に口嘴を入れしめざるやう身に取つて烟ッたき奴原の口を縫ひ筆を枉しめんと先づ第一報知新聞の藤田茂吉様に月々五十円いろは新聞の仮名垣魯文様には朝野新聞の成島柳北様が紹介で年金六十円其他東横毎日社の沼間守一様は申すに及ばず大小新聞記者の重立たる人々（官権新聞は勿論）に順位不同夫々の

鼻薬を飼ひ金轡を箝て己が味方に籠絡込み残る隈なくお手当の行届居たる故を以て今まで内幕の襤褸を現はさず彼の地獄の沙汰も金次第とやら流石輿論の耳目なりと自から任じ自から称する新聞記者其人にして五斗米ならぬ紙幣のために腰（ではない）筆を枉げるとは偖々苦々しきことでござる（略）」

12月20、21日　「松木正守君の履歴」　＊雑報欄にかぶせ見出し、21日は芳年の挿絵付き。

＊12月20日　「雑報」　「朝野新聞　此程芝区露月町十五番地栗田信太郎（競錦堂）より出板の三菱会社内幕秘聞録と題する一書の広告文を朝野新聞社へ依頼したるに同社にては右の広告は讒謗の恐れありとて紙上へ掲載の議を固辞たるよしなるが同社員の中には昨日の新聞にも記載せし如く三菱会社より今度の事件に付き三千円の鼻薬を貰ひたる者ありとか風（ほのか）に聞しが而て見れば右の広告記載を謝絶たるも満更無理とも思はれず熱海行の御入用は大方夫から出たか如何だかペケレッパ！」

「出版　社友百華園主人の訳述せし仏国革命起源西海血潮小暴風第一編并びに夢柳狂士の訳述せし同革命記自由の凱歌第二編を弊社に於て出板しましたから愛替らず御愛読を乞ふ」

＊12月21日　「雑報」　「北陸自由新聞　越前国福井佐久良下町四十八番地の北陸自由新聞社より社名と同様の立派なる新聞を発行されたり社長は杉田定一氏にして嘗て立憲政党新聞社に在つて論説の筆を把られし永田一二氏も主事に署名されたり」

「弁駁　一昨日の紙上に掲げし三菱会社の鼻薬一件に付きいろは新聞の仮名垣翁より弁駁書到来したり依つて其全文を記し正誤に代ふ／昨日貴紙面御登録相成候三菱会社云々条中老生は成島柳北氏紹介を以て該社年給六十円云々は事実相違に付左に弁駁仕候／老生先年仮名読新聞担任の折三菱社員岡崎惟元氏被参諸雑誌二三の社長と交際相結度紹介致呉候様依頼候間承引の上近事の林氏九春社の服部氏其他二三の諸君を周旋致候の

み而して其頃は仮名読社の魯文にていろは社設立此方該社とは不通に御座候殊に成島氏紹介杯とは無根の義に御座候いろはの魯文にあらず仮名読の魯文なるを判然御正誤被下度且年給六十円も無根に御座候貰ふならもつとたんと貰ひ升六十円の腐金で三菱の碇綱に束縛さるゝ猫老爺では無之御賢察の上何でも能からいろはの三字は御取消被下度是は虚でない自証ながらも真実々々／十二月廿日　魯文」

12月26～28日　「明治十五年の店勘定」全三回　＊論説欄に別行見出しに連載。

＊12月26日　「雑報」「記者曰す　当新聞第廿五号孝子の薄命の挿画文中政吉は頬冠りとあれど素顔なるは如何又第廿七号合鏡心妍醜楠公神社の挿画お糸の徒跣参詣と記しあれと草履を穿て居るは文と画と齟齬するは記者の過誤か画工の紙苦尻かと五鼠屑様より御忠告右は画工の筆違ひ記者の見落し真平御免爾来は深く注意仕まつれば今度の処ろは幾重にもお見宥しを願ふにこそ」

「投書」「読者の注意　浅草　漱石迂叟／（略）开も唐山元明の才子慧手が作りたる稗史には七法あり一に主客二に伏線三に襯染四に照応五に反対六に省筆七に隠微即ち是也就中隠微は作者の深意其文外に在て百年の後知音を俟ち其温奥を悟らしめんとす故に操觚者流は更にも言はず看客も亦深く注目すべきの要点なり水滸伝には隠微多かり李贄金瑞等の文人才子に水滸を弄あそぶ者多かれど作者が筆意の微妙なる当時の明政府を刺衝せしとは見るものから評し得て詳細に隠微を発明せしものなし熟々思へば世を憂へ時を痛みて市井に隠れ堪ぬ遺憾を楮先生管城候に訴たへて慷慨悲憤の溢るゝ処ろ変じて滑稽洒落の書となり化して稗史小説となる只一口に作者と嘲けり日夜机に打向ふ涎くりの食もたれ果敢なき業と笑はるゝも群雀の嘖々たる何ぞ其中に大鵬の扶搖を搏つ雄志を抱く雛鸞の栖を知らざらん単に童幼婦女子の耳目を悦こばせんとの業にはあらで作者の人物如何を察せば多少の隠微なからずやは去ば児戯の冊子物語及び猥褻の春史と雖ども決して軽々に

看過すべからず貴社の新紙も我輩の時勢に後れし老眼には発見し難き寓意の隠微文字の外に嘸あらんと堅く信じて一言半句も能く読み能く味はひ是は斯々彼は云々と己が心に判断するは記者に対する読者の義務その心して読たまへと入猿老婆（否）翁の心切を諸君何と思しめす将亦記者の操觚（ふでと）る心に思ひ当るや当らずや／記者云ふ能く新聞紙を読む者詩に所謂忖度是れ也拝謝〳〵」

＊12月27日　「雑報」　「冤を雪ぐ　昨日或人よりの投書に曰く三菱会社は貴社新聞及び自由新聞に痛く我社の内幕を攻撃さるゝを奇怪に思ひ争でこの邪魔を払はんと同社の参謀楠正成も三舎を避け諸葛孔明も徒跣で逃出す大智者岡崎惟素氏の謀略を以て四五日前有喜世新聞幹理伊東橋塘氏を招寄せ岡崎氏自ら之に面し幾干の鼻薬を餌ひ伊東氏が得意とする罵詈讒謗の筆を借り貴社及び自由新聞の体面を汚し其声価を落さんとの結構あり去ばにや去廿四日の有喜世新聞紙上に古澤滋氏の非を訐き併せて出店小新聞云々の文字を用ゐて暗に貴社まで讒毀したりそも〳〵有喜世新聞は仮令如何なる事を記立て挫た腕に力を入れ命限り罵詈讒謗の筆を揮ふも害なく益なく可もなく不可なく社会に対して夫程の効力あるか有ざるかは世人の既に知る所ろ貴社も疾より御合点ならんがお心添まで申し上る云々とあり嗚呼是何等の怪報ぞや一大政府を成せる如き彼の三菱会社にして如何に血迷めされしとて社会の風潮を動かすに足らざる小新聞の筆を頼みて社運を挽回せんなどゝは笑ふに堪たる僻事なればあるべき事とは思ひも寄らず今仮に数歩を譲り真に此の事ありとするも伊東氏は世にも名高き方正廉直の君子にして改進主義より銭取主義我猿さし売破落戸強迫の憎むべく厭ふべきの所業決してなき事は弊社員渡辺文京も同氏と交際深密なるより堅く信じて疑がはず否為に保証する所ろなれば仮令三菱会社より百万円の鼻薬を飼れたとて同社の錨綱に束縛されその筆を枉るの理断じてなし箇は是弊社と有喜世新聞社との中を割んと搆へたる板面（いたづら）者の離間策に出しものとは信ずるものながら江湖の中には此等の策

に眩惑され伊東氏を疑がふものなしとも言ず社交上の主義は異にするとも私交の情義点止がたく同氏の為に転ばぬ先突ツかい棒の老婆心切その冤を雪ぐと云爾（併し入猿お世話金アハ、、、、）

「社告」　「今般郵便条例頒布に相成り候に付来る明治十六年一月一日より左の通り改正仕候／絵入自由新聞看客諸氏に稟告す／是迄絵入自由新聞四枚束ね持込税を払ひ差出し居候分は来年一月一日以後持込税廃せられ候に付一ヶ月郵便税拾四銭と相減じ申候○是迄郵便局留にて差出居候もの一月一日以後は直ちに御宿所へ差出し候方御便利と存候間御所書御申越被下度候○東京府下にて遠方不便利の地へ御住居の向へは帯封印紙を以て差出し居候も有之候処是等は一月一日以後一銭郵税を要し候様相成候に付絵入自由新聞代価の外別に郵税申請候／投書家通信家諸氏に稟告す／新聞原稿無税逓送を廃せられたるに付来一月一日以後御投寄の分は並書状の通り印紙御貼付下され度候」

＊12月29日　「雑報」　「東洋出版会社　漆間真学三宅虎太等の諸氏が首唱者となり先般中より計画の東洋出版会社はいよ〳〵本社を京橋区八官町に設立し広く出版の業に従事され同盟の人も殊に多き由なり」

一八八三（明治一六）年

1月4～12日　「蝴蝶世界夢の通路」全七回　＊雑報欄に別行見出し、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。1月13日雑報に「記者謹白　初摺以来殊に看官諸君の愛読を辱けのふせし「蝴蝶世界夢の通路」はいまだその事実の半に至らざれど聊か自警するところあるを以て昨日の紙上（第七回）限り掲載を止め後稿を取纏めて別に弊社より出板すべき故請焉れを諒知せられんことを尤も其代として明日より英京龍動にて発行さるゝグラフキツク即ち同業の絵入新聞より先きに埃及の叛将アラビーと戦ひ勝し有名の英雄陸軍中将サー、ガーネツト、ウオ

ルスレーの伝を翻訳し密画を入れて観覧に供すべし」と広告される。

＊1月4日　編集兼印刷長　今井藤次郎に、世話役　渡辺文京　和田半狂／手伝人　宮崎夢柳となる。

＊1月5日　「雑報」　「東洋新報廃刊　同社は労症病の肉の減るやうしだい〳〵衰頽し無代価の呈進先よりも「以来配達無用」と謝絶られ真の得意は漸やく百枚にも足らずその筋にても無益物とお気が注れ命の綱と頼みに思ふ肝心要の保護金も断然廃止されたるより旧臘廿九日限り廃刊し破れ機械と磨滅活字は株と共に売却の目的だといふが機械や活字は古鉄買に見せたら潰しの直段で買うかしらねど株は誰でも買人はあるまい而して新聞廃刊の代り一の学校を設立して生徒を募り官権の学問（どんな学問だか）を仕込み成業の後漸進主義の保守党に引込む手段なりとか又その学校を設立する場所も至つて場末の浮世に遠く地価の安い処ろを頻と尋ねて居るとはヤレ〳〵の毒笑止千万」

＊1月7日　「雑報」　「其人なきに苦しむ　報知新聞の前社長たりし小西義敬様は今度半官半民の間の子を気取りて中立主義を拡張せんが為め一の新聞紙を発兒せらるゝ目論見中の由なるが其の筆を執る人なきに苦む」

「高知の近況　此程上京せし高知県人の話を聞に自由の説民権の論は本家だけありて相変らず盛なるが先頃より目論見中なる自由党の機関と為すべき政党新聞も未だ発行にならず是迄其の代理の如くなりて自由活溌の名ありし自由新誌は禁止せられ土陽江南の二新聞も解停の命なく只だ演説の舌頭のみにて反対党の奴原を攻撃するに過ぎざるより彼の吏権徒の発兒する高陽新報が鬼の来ぬ間に洗濯と時を得顔にあられぬ戯言を吐き散らすは実に傍ら痛き事なり又た労役社会即ち力役自由党其他平民連の気象は日々に進取に赴むく景況にて至極目出度事どもなる由」

「水野寅次郎　寅次郎殿様には彼の東洋新報が紙数大の紙幅を俄かに縮小せし以来然らぬだに多からざる看客

の益す〳〵減じて一ヶ月の集金漸く二百円に足らざれば保護金の五百円を算入しても毎月五六百円の損毛故終に前号にも記せし如く昨年限ぎり廃業（改革の都合あれば当分休刊といふ名義で）せしより社員は一時糊口の方向に迂路つくを余処目に見捨て殿様には府下小梅村曳舟通りへ五六百坪の地所を買ひ込み安楽に喰ひ給はん打点（もくろみ）なりとの浮話（うわさ）作なれど受けとり悪い」

「日本外史支那版　頼山陽の日本外史は数年前より支那に購求するものあれば追々輸出したりしが此頃彼国にて学士か評論序跋を加へて翻刻したり我邦人の著書を彼国にて翻刻したるはこれが嚆矢にして既に去月初旬に輸入したりといふ去ど我国の版権ある書の彼国にて翻刻せしを輸入するは我国の禁ずる所なれば輸入せしとの説は如何にや」

1月7～10日　「奇遇物語」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年の挿絵付きで連載。

1月9、10日　「保護の弊干渉の害」　＊論説欄に別行見出し。

1月9、10日　「情死」　＊雑報欄にかぶせ見出し、10日は芳年の挿絵付き。

＊1月10日　「雑報」　「灯燈持　曲亭翁の皿皿郷談初編一冊蘭渓氏の淀屋辰五郎の伝一冊とも此程日本橋区室町三丁目の滑稽堂より売出になりました」

＊1月11日　「雑報」　「発売禁止　社友百華園主人の意訳に係り嘗て自由新聞紙上へ登録せし「西洋血潮小暴風」と題する一話を編纂し先頃弊社の柳谷藤吉が出版せしところ右は世治に害ありと認められ出版発売差止る旨昨日内務卿より府知事を経て達せられたり」

「新刊稗史　南鍋町の兎屋より通俗後西遊記の第二編を発兌しました」

＊1月12日　「雑報」　「発行禁止　有喜世新聞は昨日其筋より自今発行禁止を申し付けられたりお気の毒の事に

こそ」

1月12、13日　「悪漢淫婦」　＊雑報欄にかぶせ見出し。13日は「お峯の話し」と題される。

1月13、14日　「日本痴」　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年の挿絵付き。

＊1月13日　編集兼印刷長　飯田熊次郎、世話役　渡辺文京　和田半狂／手伝人　宮崎夢柳　画工　月岡芳年となる。

1月14日～2月1日　「ガーネツト、ウオルスレーの伝」全一五回　＊雑報欄に別行見出し、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。

＊1月14日　「雑報」　「豊年温故誌　同誌は何故か昨日よりサツパリ其の体裁を変換して全で絵入新聞の様になし従来の温故の小説を記す事を止められしが其の雑報中に「有喜世新聞は両三年前より政治の思想を涵養して常に活溌の論鋒を出し昨年よりは改進党に加入し其の一小機関となりて主義を貫き居られしが云々」と左も大業に書きありしは何う云ふ積りか知らざれども此れ誤解の最も太甚しき者にて政治の思想とは一個人の私徳私行の域内に立ち入りて之れを訐くの謂ひにあらざるぞ活溌の論鋒とは馬鹿頓痴気大箆棒杯極めて野卑なるの筆にはあらざらめ是等の区別は誰れでも疾く知り侍るのみならず有喜世記者も亦た業已に承知ならん然るに彼の温故誌記者は如何に菽麦薫蕕を識別せざるの没分暁漢（わからずや）なりとするも斯る生意気の言を吐くは最と愍れなる事ぞかし最と気の毒なる事ぞかしト何んだか四角張つた投書が参りましたが記者も最と可笑き思ひをなせしゆへかいつまんで一寸茲に」

「灯燈持　馬琴翁叢書第一輯第一冊（殺生石後日怪談）が此程例の兎屋より売り出しになりましたが挿画のある面白き書であります」

1月16～18日　「日本国の容体果して如何」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

1月16～21日　「因果応報」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、16、19、20日は芳年の挿絵付きで連載。

＊1月17日　「雑報」　「社告　世上に種々の悪戯を為すものあり間々広告を偽造し郵便を以て寄送するより弊社之れを掲げて他人の迷惑を惹き起すの不都合を生じ候故今後は御依頼主の御印影を見認とし掲載いたすべく依て御見認なりと御調印の上御寄送奉願候也」

＊1月18日　「雑報」　「我が政府にては今度在官者に筆を執らせ王道新報と号する官憲新聞を発行せんとて最初其印刷方を印刷局へ命ぜられしに余程の高価たりしを以て更に日報社へ依頼されし所同社にては例の保護金にては到底維持の見込もあらざりし折からなれば福徳の三年目なりと大に喜び早速印刷局より三分一の廉価にて引受たるを当時在熱海の得能印刷局長には聞るゝや否痛く憤ふられ好し官の物にして民間へ依頼さるゝとの事ならば我が印刷局は固と紙幣製造の為めに設けられたる局なれば自今は布告類の印刷をも一切謝絶すべしと西郷農商務卿を以て申入れられしかば其筋にても甚だ当惑され殊に民間へ依頼しては漏聞の恐れあればとて日報社にては専ら準備中なりしにも係らず復び印刷局へ命ぜられしが目下日報社にては其筋へ向つて頻りに違約の廉を迫り居る由且つ同新聞は来る二十三日此の発行にて毎日三万宛を刷り立てらるべしとの噂あれど信偽の程は保し難しと自由新聞に見へたり」

＊1月19日　「雑報」　「哀哉痛哉　嘗て仏国革命起源西洋血潮小暴風なる一篇を自由新聞紙上に掲げて慷慨悲憤の志士たることを世に知れたる社友百華園主人（岡山県人桜田百衛）は其肺患の為めに一片有為の心胆を抱きながら空しく薬爐烟底に久臥せられ居たりしが無情の天終に年を仮さず昨十八日の午後芝区愛宕下町の客舎に於て□焉世に即かれたりと今や都門春回つて隅田の川飛鳥の山主人が号し来りし百花の爛漫たるも亦将

さに近からんとす然るに輩をして今年の春は去年の春に似たり今年の花は去年の花に似たり独り今年の人は去年の人にあらざるを奈何んせんとの嘆あらしむるに至りし耶嗚呼花耶々々何ぞ其れ自由の風に先つて斯の如く短命なる一杯の黄土旅襯長く埋み数点の青燐覊魂永く化す生きては遂に郷国に帰る能はず死しては復た社会に作す可らず嗚呼々々哀ひ哉痛ひ哉」

1月19、20日　「公判」　＊雑報欄にかぶせ見出し。20日は「門野又蔵君の裁判言渡書」と題される。

＊1月20日　「雑報」　「堤燈持　雑賀柳香氏の編輯明治小僧噂高松といふ絵本が日本橋区室町三丁目九番地御馴染の滑稽堂より発兌」

1月21、27、28日　「東洋社会党」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し。党則草案を掲載。

＊1月21日　「雑報」　「絵入朝野新聞は　本日の広告にもある通り明日よりいよ〳〵発兌記者には例の有名なる前島和橋氏あり局長には銀街に去る者ありと聞えたる大通粋士山田孝之助（別号風外又籟生）氏あり定めて御盛ん〳〵」

「広告」　「絵入／人情自由新話　半紙摺極美本／仕立定価一冊／金弐十銭／毎月壱冊ツ、出板　第壱編来二月上旬出板／右は絵入自由新聞に記載したる西洋新話及び人情話等を掲載し大蘇芳年の密画を加へ鮮明なる美本に製て出板いたしますれば尋常一様の雑誌合巻と見做たまはず沢山御購読あらんことを偏に願ひ奉まつり候（但し御注文のお方は必らず前金お遣はし可被下候前金御送致なき分は送本仕まつらず候）／出板／発売元／芝区桜田鍛冶町十／番地宮崎つね方　芙蓉閣」

1月23、24日　「以心伝心」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊1月23日　「雑報」　「愛岐日報　同社にては従来自由党員と改進党員と打交り自然折合はざる様子ありしが今

度更に社中の組織を一新して真正の自由を伸長する機関に備へらるゝ由」

「広告」「故為永春水先生作情話本発売の広告／○恵の花　梅暦発端／○梅暦正編／○春色辰巳の園　梅暦の後編／○春色英対暖語　梅暦の続編／○梅見の舟　梅暦拾遺　活版絵入美麗／西洋綴冊／いろは文庫）絵入活版刷にて。既に発售。御高評難有奉存候）の色葉に倣ひ。馨りを慕ふ梅暦。今年新たに立かゑりて。植地（活字）に栽培（製冊）を改たれども章句は花麗ぐ古人の好文。他に魁けて発兒くなる。春の恵の花の兄。空花ならぬ婀娜吉が。色を争ふ恋の意地。怒をたつみの。その魂丹。又米八が余念なく。一夫を守る弦妓の真情。六出の中なる梅の五出。その英にさし対ひ。暖かに語る途中は。梅見の舟の楫取よく。一重に八重に編を継ぎ。終には団円く結ぶ実の。粋（酸）なる味を咬分て。香も名も高く娯評判を。臥竜の如く臥して希がふになん／魁進堂出版／大売捌所　芝三島町　山中市兵衛銀座二丁目山中孝之助／銀座四丁目　山中喜太郎神田雉子町巌々堂／横山町三丁目辻岡　文助神田五軒町弘　令　社／馬喰町二丁目石川治兵衛通二丁目　稲田佐兵衛／南鍋町一丁目兎　屋　誠通油町水野慶治郎」

1月24、25日　「無理情死」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊1月24日　「雑報」　「東洋絵入新聞　旧臘休刊されし東洋新報社にては今度題名の如き新聞を発行せんと目下頻りに協議中なりとぞ」

＊1月25日　「雑報」「嗚呼の白徒　昨日の絵入新聞に高縄の華族毛利家にて詐欺取財の業をなしたる者の事実を報道せし中に彼の白徒は自由新聞社に知る者ありといひ弊社の渡辺文京の草稿を携さへたり杯言し由なるが知る者とは誰の事なるや又文京は詐欺者平野久太郎及び飯塚とかいへる者とは絶て一度の面識もなきに浅墓にも事を巧みて己が欺術を逞ましふせんとす素よりかゝる白徒ゆゑ如何なる事を吐しやら弊社に掛る事なり

とも絶て知らずに過せしを絵入新聞に記されて自由新聞社及び弊社の為に世人の疑がひを解かれしこそ同業の交誼謝するに余りあり憎むべきは彼の白徒絶て知らざる文京を悪事のダシに遣ひし上我新聞の体面を汚さんと搆へたるはとんだ災難迷惑千万の至りにこそ」

「記者曰す　今度発兒の絵入朝野新聞の挿画を弊社の画工芳年。芳宗が画くよし言触らすものあるよしなるが芳年芳宗は弊社新聞の外他の新聞挿画は決して画き申さず念の為め此に一言す」

＊1月27日　「雑報」「自由出版会社　同社の第三回出板書籍は先きに出来上り各同盟員へも已に尽く発送済になりし由にて自由平等論上巻、共和原理下巻、英国議院政治論王権政府諸会議篇議院政府枢密院篇合巻欧米十九世紀政事沿革史上巻、欧州代議政体起原史第一巻、各一部づゝ弊社へも贈られしが其有用は勿論余程美麗なる書籍なり」

1月28日～2月2日　「紅縄奇累」全四回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年の挿絵付きで連載。

1月31日、2月1日　「言論者を処するの刑」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊1月31日　「雑報」「自由新聞講談　舌師松林伯知は当新聞の続々話合鏡心妍醜。冤枉の鞭笞及び吹雪の花笠など和洋取交ぜ自由新聞講談と唱へ来二月一日則はち明日より昼夜とも横浜馬車道の寄席丸竹亭にて立読の開講は入らはい〳〵と雑報央の堤灯持」

「絵入人情自由新話　ト題し当新聞へ掲載せし続々新話及び其他面白き西洋小説の苟しくも自由に関する新奇の珍談を蒐集し毎月一冊づゝ芙蓉閣より出板するとの事なり委しくは広告を御覧の上沢山御注文を願ひますと因縁に依てかくの如し」

＊2月1日　「雑報」　「土陽新聞　活溌悲壮の論説を以つて其筋の忌諱に触れ久しく発行停止の命を蒙むり居た

りし土洲の土陽新聞は漸く解停の沙汰を受け去月廿四日より更に其の体裁を変へ従来の社説を廃して雑報のみの絵入新聞となし発兌されたり」

「新刊書籍　馬琴翁叢書第壱集第四冊を南鍋町の兎屋より又柳亭種彦氏の著作「楓時故郷の錦木」を正本仕立にして芳譚雑誌社より今村有隣氏訳仏国憲法類纂の初篇が中外堂より出版」

「広告」　「大坂朝日新聞売捌告条／這回弊店大坂なる朝日新聞社のために広く四方に其新聞紙を売捌き候元来朝日新聞は明治十二年一月その刊行を創しより非常に江湖の愛顧を博し其盛昌の勢は題号に副て宛も朝日の昇が如く随て爾来漸次に紙幅を拡め記事の質を撰み挿画の巧を加え今日に迨ては已に年を閲する四年号を重る一千一百の上に超え又日々の刷出二万五千の多きを致し最早三万に垂とするの勢ひ終に我国挿画新聞の巨擘と称せらるゝに至れり抑も此新聞たるや総て傍訓を付け大政府諸官庁の布告発令の如きは勿論日々世上に現るゝ肝要の事項は固より探訪の精力を尽して敢て漏すことなく殊に時機に後れざらんことを図り東京及び自余の要地には常に通信の員を置てその電報を採録し其他雑事の奇聞珍談に渉るものは之を記するに平易流麗の文筆を用ひ之を飾るに細緻艶麗の挿画を加へ且その事の長繁なるは稗史体に倣ふて数回の続齣説話とし又時々の商況は米銀綿油より百科の価値景況に迨るまで日々に報道を怠らず要するに朝日新聞は記事の文章平易を旨とし卑近の土語を写出して其情態を悉すに伝神の妙ありとの公評を得已に夫の続齣説話の如きは一時伝称し往々之を戯場に演ずるに至れることあり実に婦女子と雖もその意を解し易き文体なれば世の時務に注目せらるゝ大人は申すに及ばず各地士農工商の諸氏必読の好新聞紙なり且夫大坂は我国第二の都会にしてその物事の全国に関する所多し四方の諸君陸続愛顧せられんことを希望すその紙価逓送の費は左に記する所の如し／壱枚ニ付金壱銭五厘　壱ヶ月前金三拾銭／但府外逓送ハ御規則ノ郵便税申請候事／東京売捌所／日

本橋区兜町三番地　中外物価新報／商況社／仝元大阪町　法木徳兵衛／仝浜町三丁目六番地　閑逸舎／仝南茅場町四番地　三浦屋金三郎／京橋区築地壱丁目四番地　休林堂／下谷区練塀町四十九番地　三光堂／仝池之端七軒町三十八番地　松の池／日本橋区川瀬石町十六番地　挹翠舎／京橋区竹川町八番地　江上勘左衛門／仝宗十郎町五番地　川住元次郎／日本橋区兜町壱番地　大取次製紙分社／追テ売捌被成度方ハ兜町壱番地製紙分社へ御照会有之度候也」

2月2～4日　「傖夫の言を聞て感あり」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

2月2日～3月1日　「袖の露」全二一回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。2月20日は「記者謹白　本日は絵組の都合有之候条（オツト何処かの御託宣見た様ナ）袖の露はお預りとしました」と休載、2月23日も「記者曰す　袖の露と色の世の中と書出した話しの跡は大組絵の都合に依り明日までお預かり」と休載される。

2月2日～4月24日　「浜松風」全六四回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。2月4～13日、3月28日、4月18、20～24日は「浜の松風」とされる。2月28日は挿絵なし。

2月2～6日　「強盗捕縛」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。4日は「強盗永田初蔵の話し」、5日は「強盗永田初蔵の話し」と題される。

＊2月3日　「雑報」　「講釈師の命数　弗婁奈（ふるな）も三舎を避け蘇秦張儀も徒跣で逃出す薄口唇のお喋舌達者自分免許の開化ぶり講談師彼の松林伯円は一昨一日の夜銀座亭の演壇（ではない）高坐に登り鼻高々と例の出鱈目前口上を併べ立てる中に「傾日は政談演説がめつきり盛ンになり十銭の高い坐料を払つた上鮓の様に大勢がギシ〳〵圧合ふ程なるも聴衆は日一日より培し月一月より埴え先を競ふて出掛る景況は中々以て我々講釈師が

如何に顋の外れ咽から血嘔を吐くほど喋々喃々（おしやべり）をしても追付ませぬ斯く時勢の気運が自由主義に傾むきしを見れば我々も此処に注目して愈々講釈に改良を加へ人心の帰向する処ろに従がひ前途の事を計画せざるときは我々講釈師は明治二十三年の暁に至らば忽まち命を失なふに至らん嗚呼悲しいかな面白いかな云々と説出すを聞て聴衆否客一同笑ふもあり感ずるもあり動揺めき渡りて見えたりと聞て来た人の話しなるが有繋講釈師の隊長だけありて至極宜い所ろへお気が付かれやしたモシ世間の人々よ是啻に講釈師のみの事と思ひて努々油断したまふなよ呵々」

2月6、7日　「家庭の教育」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

2月6、7日　「高知県学校紛議余聞」　＊雑報欄にかぶせ見出し。7日は「高知中学校紛議」と題される。

2月6～9日　「新富座略評」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

2月8～10日　「国会の開設を俟つ者に告ぐ」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

2月9、10日　「新富座の紛議」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊2月13日　「絵入自由新聞」　「傍訓新聞の本分／大凡そ新聞紙の本分たるや概して之れを云へば世の文明を進むるに在り故に其の紙面の大小に論なく其の主義の差異を問はず皆な其の目的とする所のものは此の一点に在りと断定せざるを得ざるなり然り而して世の文明を進むるの方法順序に至つては実に千差万別にして容易く述べ尽す事難しと雖も其の最も急務とするところのものは各人をして自由の何物たる事を解せしめ而して愛国の心を培養し以つて日本国ある事を知らしむるに在り茲を以つて余輩は極めて浅近なる論説を記して専ぱら中等以下の人民を誘掖堤醒して未だ嘗て怠らざりき只だ恐る或は余輩の論説其の理屈に偏するが故に婦女子輩の読んで解するに苦しむ事を是れ則ち余輩が平生勉めて注意を鋭くして其の望みに背かざらん事を慮

る所なり／夫れ然り然るに傾日余輩に向ひ傍訓新聞の本分たる事を近きに取り義を勧懲に発するにあらざれば童蒙婦幼の眼に染ず仮令ひ識者一人の可とするところあるも不学者万人の面白からずとするときは何を以つて営業永続の方法を得む云々又故らにその愛国の余り慢りに政を談じ法を議するは最も禁ずべきの極りなりと告ぐる者あり余輩今ま此の言を聞き其の無気力にして相共に文明の事を談ずるに足らざるを愍笑したり抑も勧善懲悪の事たる実に美にして之れを勧め之れを懲らすは勿論前覚者の任とする所なれども試みに事実に徴して其の結果を見れば其の事たる誠に狭隘なるを免れず殊に彼の俳優講釈師落語家の輩は皆な是れ勧懲の事を看板にして天狗然たる形容を粧ふと雖ども其の結果を見れば却つて厭ふべきの弊あるにあらずや今日の傍訓新聞が金城湯地と恃む所の勧善懲悪の主義は決して之れを俳優講釈師落語家輩と同一視するにはあらざれども余輩は其の功能の存外小少なるを気の毒に思はざるを得ざるなり而るに其の童蒙婦幼の眼を喜ばして其の歓を買んと欲し且つ只だ営業の永続を計らんと云はゞ余輩復た何をか云はん然れども其の慢りに政を談し法を議するを以つて傍訓新聞の禁ずる所なりと云ふに至つては余輩何ぞ其の蒙を啓かざるを得んや夫れ新聞紙の資格たる世の文明を進め江湖耳目の機関たるの任を負ひながら政を談じ法を議するを避くるが如きは余輩寧ろ為めに憐れまずんばあらざるなり然りと雖も彼輩却つて余輩を目して徒らに悪まれ子供の称を下して己れ自ら局促たる狭隘の区域に姑息し恬として其れ省みざるに於ては余輩復た何をか云はん是れ只た一種の商估者流にして相共に文明の事を談するに足らずと云はんのみ呵々」

「雑報」　「新聞廃業　不偏不党とか政党以外に独立するとか左も仰山らしく触れ込んで昨明治十五年十一月十八日八官町十五番地から其第一号を発兌したる彼同盟改進新聞は光つた程鳴らず先きに二週間休業の後引続いて廃業するものと見え張紙が店に出て居ります」

＊2月14日　「雑報」　「提灯持　福山奇談陸奥の松風の後編を元大坂町の法木徳兵衛方より出板せり」
＊2月16日　「雑報」　「提灯持　小林清親氏が筆の三十二相の狂画は今度全紙出来し神田須田町の絵草紙店原胤昭方より売出たるが彫刻摺とも美事の出来栄中々評判が宜との事」
2月18、20日　「福嶋県人の獄」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
2月20日～3月4日　「再会奇聞」全九回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。
＊2月20日　編集兼印刷長　飯田熊次郎、社員　渡辺文京　和田稲積／客員　宮崎富要／画工　月岡芳年と改称される。
2月21、22日　「日本の妖怪　郡司駒吉　演説」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
2月23、24日　「福嶋県民を弔ふ　野矢金三郎　演説」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
2月23日～3月3日　「復讐」全六回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。
2月25～28日　「政党の性質をして過激に変ぜしむる勿れ　和田稲積　演説」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
2月28日～3月10日　「因果物語」全九回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。
3月1、2日　「嘲を解く」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
＊3月1日　「雑報」　「新刊　諸君お待兼の絵入人情自由新話は昨日新肴町十二番地芙蓉閣より第一編を発兒せり挿画は弊社の芳年が筆を揮ひ製本も美事印刷もよし中々読処のある宜い稗史なり又二編は尚一層美事に出板するよしなり」
＊3月3日　「雑報」　「新刊稗史　昔時の合巻物は残らず平仮名にて読悪き処ろより今度漢字の読本体に綴りか

へ傍訓を添へ読みやすく解しやすく殊に芳年の挿画も加へ美事に製本したる故曲亭馬琴の遺著金瓶梅の第一巻を芝柴井町の書林土忠方より出板せしが中々評判よく爾後毎月一巻宛必ず発兌する由なり」

3月4、6日　「世の所謂下等社会なる名称に就き疑」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

3月4～7日　「先非後悔」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

＊3月6日　「雑報」　「新聞発行の風評　有喜世新聞禁止の厳命を蒙むりたる後該社主と幹事伊東専三氏との間に何か紛議を生じ専三氏は断然退社の上目下該社より出願中なる日本新聞と競争せんと独立曙新聞と云るを発行いたしたき旨浦壁正華と云ふ人の名を以て出願されしと聞たるが大方是は虚だろう。トハ又何故オツト跡は黙言〳〵」

3月6、7日　「夜半の鐘」　＊雑報欄にかぶせ見出し、挿絵付き。

＊3月6日　編集兼印刷長　飯田熊次郎／社員　渡辺義方　和田稲積／客員　宮崎富要／画工　月岡芳年／新井芳宗と改称される。

3月7、8日　「英雄論」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

3月7～9日　「福嶋囚人裁判言渡」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

＊3月7日　「雑報」　「独立曙新聞　前号に記せし独立曙新聞は昨日其筋に於て許可されしとのこと」

「広告」「浮言弁解／方今弊社新聞紙ヲ以テ官権新聞ノ種族ナリト申シ触シ候狡児有之趣キ右ハ全ク無根ノ誣言ニ付茲ニ弁解ス／京橋区銀／座二丁目　絵入朝野新聞社」

3月8～18日　「雪の梅」全一〇回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。3月9日末尾に「記者曰く本編の人々殊に弁士の如きは当時政事社会にその名を知られたる有志ゆゑ聊か憚るところありて皆

其姓名を変へ置きたれば斯る処に斯る人なしと咎め給ふこと勿れ且つ此の画様の分教は例もながら次回に譲りぬ」と付言される。

3月9～11日　「欲の世界」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊3月10日　「広告」「新聞紙発行広告／開花新聞　半紙五枚／毎日刊行（月曜大祭／祝日休刊）／定価　一部金一銭五厘一ヶ月前金三十銭／右は今般官准を得て来る十日より発行仕り候間陸続御購求下され度且平和穏当の文詞を記載し傍ら余情を挿絵に写せば婦女子と雖も容易読み得る新聞紙なり希がはくは発兒の日より隆渥の愛眷を垂れ給はんことを此段広告仕り候也／明治十六年／三月　京橋区南鞘町六番地／開花新聞社／右新聞紙今般下名に於て大売捌引受候陸続御注文の程願上候　東京麻布六本木町十五番地／北原新八／同飯田町二丁目／武田平治／同浅草南元町二十六番地／小川吉五郎／同元大坂町／法木徳兵衛／同新葭町／良明堂／同神田雉子町／巌々堂／同赤坂裏一丁目／赤川五兵衛／同牛込肴町／深野弥兵衛／横浜住吉町四丁目／角田屋てい／下総千葉町／立真舎」

＊3月11日　「雑報」　「泉市　前号に記したる芝神明前の書林和泉屋市兵衛は是迄偽版の廉にてしば〳〵告訴されしとせしは誤聞にて従来右等の件にて告訴されし事は絶て無よしなるが今度綱鑑易知録の偽版一件にて告訴されしは事実相違なく現時お調べ中の由なれば黒白やがて判然たるべし」

「提灯持　京橋弓町の著作館より里見八犬伝の第三輯合本一冊及び絵本通俗三国誌初編の下巻一冊木挽町一丁目の万字堂より演説亀鑑と題する小冊を発兒せり何もよい本」

3月11、13日　「義理と情の板挟み」　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年、芳宗の挿絵付き。

3月14、15日　「雪と墨」　＊雑報欄にかぶせ見出し、挿絵付き。

3月14、16日　「英雄好色」　＊雑報欄にかぶせ見出し。
3月15、16日　「人を評論せんとする者を評論す」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
＊3月15日　「雑報」　「小川定明氏　同氏は旧峡中新報社員なるが此程自由亭皆春といへる芸名にて講釈師となられ得意の雄弁もて叩き立んと鑑札下附の儀を県庁に願ひ出られし所願意聞届け難き旨指令されしかば氏は嘆息して或人に語らるゝやう余は差し向き活路に究苦するより日頃少しく習錬せし講釈の業をなして生計を助けんと思ひしところ何の理由も示されずして願書却下せられたり左れば余は営業自由の損害要償を法衙に訴へ出んとすと云はれたる由イヤハヤお気の毒」
3月15～18日　「叶屋歌吉」全四回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。
3月15、16日　「愛国一片の情」　＊雑報欄にかぶせ見出し。
＊3月16日　「雑報」　「新訳書　予て諸新聞に広告ありし矢野文雄氏が著訳の斉武名士経国美談といふ希臘古国の小説は実に近来の奇書にして挿画も古代の風俗を模写されしとぞ之れを演劇に比して云へば先づ奸党等が計略を用ひて民政を顚覆する三立目の幕明より義士離散して二幕目漁師の家は主従会する世話場あり四幕五幕目は名士美人に逢ふ艶物の世界ありて愛別離苦の愁嘆場遂に民政の恢復目出度〳〵の大詰まで巴比陀の立役あり令南の女形あり瑪留の質朴は滑稽半道に近く李志の老実あり比律布の敵役恰も一大劇場を見るが如く是まで東洋に聞き慣れざる奇事のみにて実に近時小説中の妙案です」
3月16、17日　「二犬伝」　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年、芳宗の挿絵付き。
3月17～20日　「人口の増殖は人命を短縮するの所以を論ず」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。
＊3月17日　「雑報」　「政書出板会社　今度土屋幸一郎氏が社主土居光華氏が幹事となりて題号の如き会社を南

鍋町一丁目三番地に創立され第一回にはバックルの英国文明史ゾロルムの英国憲法史論イーマンの政治汎論コーの欧羅巴革命史等を出板さるゝよし委しくは本日の広告欄内を御覧あれ」

3月18～24日　「遺念（かたみ）の墨壺」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

3月18、20日　「露顕」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

3月20、22日　「無分別」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

3月20日～4月14日　「毒婦お楽の伝」全一二回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

3月22～24日　「政党以外に立つ人士に質す」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊3月23日　「雑報」「新刊稗史　大岡名誉公判録の初編第七の巻を宗十郎町の泰山堂より出版一から七の巻まで出揃ひ中々面白い読本です」

3月25、27日　「日本立憲政党の決議」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

3月25日～5月6日　「春雨日記」全二一回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

3月27～30日　「高知自由大懇親会」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

3月27日～4月22日　「夢の痕」全一四回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

＊3月27日　「広告」　「独立曙新聞　一枚定価金一銭／一ヶ月金弐十銭／右は諸官衙の官令を首め雑報寄書等を掲載しをり〳〵は挿画をも加へ毎日出版の傍訓新聞にして近日発兌仕つり候間御愛看の程単に希ふ／本局日本橋区橘町／四丁目十一番地　広盛舎／社主　浦壁正華／仮編集長　荻原重光／印刷人　三浦義方」四月一日発兌。

＊3月28日　「第百号の謝辞」を掲載。

3月30、31日　「敢て改進党に質す　攫雲逸史　投寄」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。
＊3月30日　「社告」「本社今般京橋区三十軒堀二丁目一番地へ転社せしに付看客諸君にお報道せ申します」
4月4、5日　「情婦殺し」　＊雑報欄にかぶせ見出し。5日は芳年の挿絵付き。
＊4月4日　「雑報」　「出板　此度日本橋室町の滑稽堂より出板になりし三枚摺の錦絵は弊社の芳年が昨年の絵画共進会へ出品せし藤原保昌月下に笛を弄するの図を其儘縮写せしものにてなか〳〵見事又下谷御徒町一丁目の今古堂から二十三年未来記が一冊出板」6日広告欄に「菊亭静閲　柳窓外史著」として広告。
＊4月6日　「雑報」　「提灯持　お馴染の滑稽堂から酔菩提全伝の前編が一冊と神田の巌々堂より史記講義列伝巻の一が出版になりたり」
＊4月8日　「雑報」　「共同出版会社　傾日織田純一郎、山田喜之助、湯目補隆、服部誠一、漆間真学の諸氏が相図り上野西黒門町に題号の如き会社を創立し専ら和漢洋の有益なる書籍を出版せんとて目下同盟員を募集中のよしなり」
「提灯持　神田小川町の郁文堂より政治格言の下巻が一冊と又大坂町の楽可奇社より楽可奇叢誌の第一号が発兌になりました」
投書欄外　「記者曰す　今般記者一同勉強いたし今一層記事の体裁を改良いたし主義は勿論自由に取り行文は婦童に読みやすく解し易きやう滑稽洒落の投書を折々掲載致しますれば江湖の投書家諸君金玉の稿を吝み玉はず陸続投寄せらるゝよう偏に願ひ上ます」
4月8、10日　「疑獄」　＊雑報欄にかぶせ見出し。
4月10、11日　「顚浮羅漢の多きに驚ろく　長岡　保　投寄」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊4月10日　「雑報」　「発兌　秋野散史の戯著にて近世積る夜話初篇一冊を芝三田の書肆万春堂より売出し又た平川町の東京獣医雑誌社より社名と同様の雑誌第一号が発行になりたり」

4月11～19日　「改進党の狼狽」全七回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

4月12、14日　「人言憂ふるに足らず」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊4月12日　「雑報」　「摺小木新聞　近頃東京に生れ出たる或小新聞は始めは不羈独立の筆勢鋭どく中々盛大と思の外今度親父の懐裏へもぐり込み漸やく驚風の病難を逃れビク〳〵命を繋いて居るとは生れた時には独歩きが出来追々成人するに従がひ知識は跡へ年を取り親父の懐裏へもぐり込む卑屈とや言ん意苦地なしとや言んハテ偖笑止千万な摺小木新聞と風評さるゝも宜ならずやと例の編輯局の生意気丁稚が独言記者叱して曰く言な〳〵」

「出板　神田裏神保町の書林鶴声社より著書新聞演説駁撃新論の第一号が発兌になりしが右は毎月一回発兌のよしにて大学者の論でも雄弁家の説でも間違つた所ろがあれば会釈なく打ち込む主意なりとの事なれば至極結構なる雑誌と云ふべし」

4月12、13日　「下足番の話説　外神田　かな井安善」　＊「雑記」欄に別行見出し。

＊4月13日　「雑報」　「化物新聞　昨日は摺小木新聞の評判記今日は化物新聞のお話し傾日その第一号を発兌し殊に独立の文字を冠らせ傲然新聞社会に出現したる彼の曙新聞は僅少の保護金に眼眩み官権党のお味方新聞となつたに付き舎主浦壁様と伊東専三氏との議論合ず流石は伊東先生だけあつて金の為に主義は換ぬと断然退社されたるより三浦義方氏も続て退社その後釜へは旧明治日報の雑報記者にて先頃民権家にひつくり返り一時いろは新聞の記者と化け目下は絵入朝野新聞の補助に署名されて居る矢崎城雄様と旧東洋自由新聞の記

者たりし浜嶋橘圃様のお両名が入社され専ぱら帝政党のお味方として官権主義とばけもの新聞併し題号は旧の如く曙新聞だと申すこと定めて能売るか如何だか兎角曙といふ題号はばけものとなるが得意と見えます」

4月15、17日　「無罪放免」　＊雑報欄にかぶせ見出し。17日は「長坂氏訊問書」と題される。

＊4月15日　「雑報」　「灯提持　顧柳仙史の閲浅草観音菩薩実伝は広徳房より発兒又た九春社の吾妻新誌第一号も刊行になりました」

4月17、19日　「地方官に望むの一議」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊4月17日　編輯兼印刷長　飯田熊次郎のみとなる。

4月18、19日　「新富座混雑の二番目」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊4月18日　「雑報」　「記者曰す　弊社員渡辺義方和田稲積客員宮崎富要及び画工月岡芳年新井芳宗が紙尾の署名を昨日より除きましたが右は新聞条例改正に依てなり決して退社等いたしたる訳ではありませんから看客諸君もそのお積りでオー怖い事〳〵」

4月18、19日　「政党を論じて私欲者流の迷夢を破る／横山町　吉野屋小僧昇平　稿」　＊「雑記」欄に別行見出し。

＊4月19日　「広告」　「看客諸君に稟告す／一弊舎独立あけぼの新聞の儀発兒以来僅々十有余日に過ずと雖も江湖諸君の愛顧を受け存外紙数を増せし段舎員一同謹んで万謝す然るに俄然編輯人中不都合の者ありて第一号紙面に記せし如く舎主の趣旨即ち独立の本色に違ひ為めに事錯雑に渉り延て配達等往々遅延に相成屢々督責を来すも是れ畢竟舎務の整頓せざるに因り看客の厚意に背き恐怖の至りに堪へず依て這回更に編輯人を聘し印刷其他とも一層吟味を遂げ諸事を整へ再び善美なる新聞を刊行する事に決せり就ては本日より七日間を期

して休刊す請ふ看客諸君発兌の日を待ち旧に依り愛読せられんことを希望す／日本橋区橘町四丁目十一番地／独立曙新聞／広盛舎／明治十六年／四月十七日／舎主　浦壁正雄／編集権／印刷人　荻野重光」

4月21日～6月30日　「知見雨」全三五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

4月22、24日　「此の窮民を如何せん」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

4月25日～5月17日　「人類社会の組立」全二〇回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

4月26日～5月22日　「栄枯得喪」全二〇回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年の挿絵付きで連載。

＊4月26日　「雑報」「新刊小冊　例の兎屋より原本訳解金瓶梅巻の四又た下谷御徒町の今古堂より書生肝潰誌と題する滑稽小冊いづれも此程発兌になりました」

4月26、27日　「弁駁書」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

4月27～29日　「新富座略評」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

4月28、29日　「酒は飲べし　外神田　かな井安善」　＊「雑記」欄に別行見出し。

4月29日～5月8日　「重罪」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、5月2日から、芳年、芳宗の挿絵つきで連載。

4月29日～5月10日　「魯国虚無党」全八回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

5月1、2日　「昇平君に質す　錦街　満津屋小僧孝太郎　投」　＊「雑記」欄に別行見出し。

5月4～12日　「強盗小林久蔵の履歴」全八回　＊雑報欄にかぶせ見出し、4、6日を除き、芳年、芳宗の挿絵付きで連載。

＊5月4日　「雑報」　「新刊稗史　伊東橋塘氏編輯の鳴渡雷於新と題する面白い当世風の合巻が室町の滑稽堂より又嶋田正穂氏編輯新聞雑誌内幕奇聞と題する小冊が神田裏神保町の鶴声社より出板」

＊5月5日　「雑報」　「革命新論　予て評判ありし現時板垣退助氏と倶に洋行中なる栗原亮一氏の訳に係る革命新論全二冊は一昨日芝柴井町の土屋方より発兌になり弊社へも一部を贈られしが右は革命の原理権利より以て政府が其の叛民を処するの法に至る迄詳論したるものなれば官民共に必読の書なり」

5月6、8日　「犯罪露顕」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊5月8日　「雑報」　「中止解散　曩に明治会堂にて大写絵を興行したる和哥山県人古林繁越氏は去月二十八日の夜群馬県山田郡桐生新町の山田亭といふ寄席にて米国写絵図解幷びに学術演説会を開かれたるに看客聴衆凡そ二百名もあり先づ前席に於て米国写真を以て彼の地の概況を示し夫より学術演説に移り合衆国の成立といふ題にて米国独立の事より共和政治の成立を説き自由の有様を論じ尋で各国より合衆国へ移住の説話に及び遂に同国の或一家にて使役する者共を圧制する風ありて番頭は手代を圧し手代は又丁稚を圧し竈婦（おさん）は人に圧せらるゝのみにて己れの圧する者なきより沢庵漬の押石を圧し遂に漬物桶を破裂せしめ一家の損害を為せし事を比喩に取り圧制の害を痛論せしに拍手喝采の声場に溢れ演者も一時は演説を止むる程なりし次に米国婚礼の景況といふ題にて本題に入る前該国の兵士某が仏国に留学の際放蕩無頼を極め終に本国へ還送せらる其浪費若干なり畢竟是等の金額は何れより支弁し得べきや仮令米国政府より出るにもせよ到底人民の粒々辛苦より出たる租税の一分子ならん然るを此等の人物に斯く海外までも持行て遊蕩の為に消費さるゝは実に歎ずべき事ならずやと説き正に本題に入らんとする時臨監の警吏は突然起立して政談に渉るに付中止するとの厳命あり依て弁士より其旨を聴衆に告げ解散を請ひしは午後十一時頃なりしと云ふ」

「編輯長所刑　弊社編輯兼印刷長飯田熊次郎は第百十九号の紙上へ風除と題して記載せし件に付き尾張町の割烹店玉和泉楼より告訴され昨日東京軽罪裁判所にて重禁錮二ヶ月罰金拾円と申し渡されたり夫に付き後役は

大西重兵衛が勤めますから相変らず御愛顧を願ひます」

＊5月8日　編輯兼印刷長　大西重兵衛となる。

＊5月10日　「雑報」　「雑誌の存廃　新聞条例改正に付ては府下の新聞社は僅かに十余社なるも雑誌に於ては二百余種もあることなれば其筋に於ては去る七日該発兌人を悉皆召喚され存廃の儀を取調べられし所即席に廃業の旨申し立る者至つて多く従前の如く発兌せんとする者は僅々三十種内外なりしと」

＊5月12日　「広告」　「社告／従来弊社新聞京／都寺町通り御池下　駸々堂　ニ取次為致居候処／今般都合ニ依リ差止候間是迄該堂ヨリ新聞御講読ノ諸君ハ何卒弊社エ直ニ御注文被下度此段広告候也／明治十六年／五月　絵入自由新聞社」

5月13日～6月19日　「南柯の夢」全一九回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗、芳年の挿絵付きで連載。

＊5月16日　社主兼印刷人　松田脇知郎／編輯兼印刷長　大西重兵衛となる。

＊5月17日　「雑報」　「開化新聞の囈語（ねごと）　開化新聞第五十五号の雑報中に過日我党が開きし久松座の演説会を評して何んだ笑止千万な囈語を幷べ立て種切れの場塞ぎとなしたり（元より御勝手次第なれども）其の中に云へるあり曰く内藤古沢大井諸氏の論理は些もロヂックに適はざる云々又た和田為次郎（彦二郎氏の誤りか）原田藤三郎とか云る弁士は壇上の法則論理の組立方に至りても我意に感服せざれば云々而して其の結末に至り「自由党諸氏よ（中略）悪徳紊理の演説を以つて好んで人を傷け小人を瞞着せんとする卑劣手段を休よ噫」と此の前後の詞を照合すれば初めには痛く我党の弁士を誹謗して一文の価値も無き様に叱咤されたり彼の改進党の人々は皆な夙にお利口連の名高き方なれば何時も立板に水を流すが如く滔々と演せられ論理とかロヂツクとか申す規則もお心得なれば巧みに喋舌られますか知らねども惜しい事には五月幟の鯉と一般で腹中無

一物又た講釈師や落語家と同じ事でホンの書物杯（ママ）の事実を取り次ぐに過ぎすして毫も気慨と胆力とがないから一時或は同臭の聴者を喜ばしむるも我々は余り感心致し申さず又た我党の弁士もロヂツク位の事は心得居れり若し論理が立ざれば其の演説の三菱会社を攻撃せしや将た改進党を論駁せしやの事も分からざる筈なり開化新聞記者は如何に識者なるかは知らざれども当日数千人の聴衆は弁士の演説を静聴し居られしなれば其の論理の如何は寧ろ公衆の公評に任せんのみ我党の弁士は只だ満腔の熱血を吐露し以つて実地に力を効（いた）さんとするの外を知らざる者なれば彼の生臭坊主が嘘八百をペラ〳〵並べ立て愚婦愚夫（わからずや）の臍繰銭を巻き上げるが如き所為に習ふお利口連の目から見ればお気に叶はぬ所ろあるは千万覚悟委細承知の助決して其の誹謗を意とするには足らねども其の結末に至り悪徳紊理云々の詞を以つて我党に告げながら其の初めの悪口は何故ぞや是れ最も尻口の合はぬ話ならずや呵々」

5月18～20日　「政治上重要の事件とは何乎」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊5月20日　「雑報」　「新聞紙雑誌　府下にて刊行せし新聞紙及び雑誌のうち新聞紙条例の改正に依り更に出願せしもの八十三社にて廃業せしものは三十二社なりと云ふ」

「発行停止　大坂の立憲政党新聞は去る十六日発行を停止されたり」

「又た囈語　一昨日と昨日の某新聞を見るに又〳〵囈語を吐きたりサテ〳〵未だお目に覚めぬはお気毒千万尤とも無主義の小新聞雑報記者の筆先だから咎め立てするも却つて大人気ないが愚痴も文句の分る様に云はれたなら正に判然と明かに教誨をも与へ遣はすべきなれども一向理由の分らない屁だとか麝香だとかにほはしても分らない尤とも記者は其の昔しは糞取りの餓鬼か薬舗の小僧かは知らざれども余り囈語が変痴気ゆへトント其の精神が聞き取れない又た昨日の紙上に我党が催ふす今日の演説会の事に付き一奇当銭だとか我党へ

抗争の誤説法なりとか書れしが彼れ記者は己れが心に引き比べて妙な所ろへ気を廻されしは最と可笑又た誤説法とは何事ぞ彼れ記者は天眼通を得たるかは知らないが未だ演説も聞かない先きから彼是申すとは想像臆騈失敬千万言語道断の至りなり元より取るに足りない小新聞だから我党の士は一笑に付し去りて相手にはせられざるべしとは思へどもチト前後を考がへ筆先を慎まず余り讒謗罵詈のみを得意とすると何所か身体に痛い所が出来て筆も取れない様になりますぞ殷鑑遠からず旧有喜世新聞社の某記者にあり」

5月22、23日　「一身上の攻撃は慎しむ可き耶」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

5月22～24日　「第二回政談大演説会景況」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊5月22日　「雑報」　「又々囈語　昨日の開花新聞は又々囈語を吐き出して曰く彼の良能を棄て嗜慾に狂奔する現時の自由党云々と彼記者無気無力の分際をも顧みず一度ならず三度まで我党の事に関して種々の妄言を逞しうし蟷螂の斧を揮んと欲す然れども我輩は是れ別に指命する者ありての事ならんと思へば其者をこそ厭ふべく悪むべけれ却て斯る指命に屈従する輩の心中を不愍に思ふのみ尤とも彼記者も良心を有する人間に相違なかるべき者なれば省みて自己の良心に問へ其の所謂嗜慾に狂奔するとは亦是れ夫子自ら道ふものにして彼の海上御前政府の菱権に左右せられ抵頭平身惴々焉として只だ其のお気に逆らひ向後保護金を失はんことをのみ是れ恐るゝ人々こそ是れ嗜慾に狂奔すると評すべきにあらずや嗚呼我が身の糞は臭くないとは能くも穿ち得しものと云ふべし開花記者よ些と省みて自己の良心に問へ」

「大坂新報社の訴訟　今度大坂新報社の資本を多く出したりと云ふ朝吹英二氏が同社の持主たる箕浦勝人氏を相手取り大坂新報社引渡の勧解を京橋区治安裁判所へ出願したる由尤朝吹氏の代理は浅田愿次郎氏箕浦氏の代理は山中道正氏にて去る九日原被対審ありしが山中氏は該社は共有物なれば引渡し難しと主張（いひは）り終に不調

となり去る十六日原告より弥々出訴に及びたる趣なり」

5月23日～8月16日　「高峯の荒鷲」全五六回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年、芳宗の挿絵つきで連載。

5月23日～9月1日　「湖水の口碑（くちぶみ）」全六二回　＊雑報欄にかぶせ見出し、6月10日、7月4日を除き、芳年、芳宗の挿絵つきで連載。5月23日末尾に「記者曰当話は曩に御評判を蒙りし浜松風中お浜と倶に嶋抜したる毒医金田幸庵の伝にして偽称山伏黒行者伝山と悪謀を逞しふして終に遠島になるの物語より其子孫今日に至るまでの奇譚なれば姑く長編を倦厭玉はず偏に高覧を賜かし」と付言される。

5月24、25日　「政事は誰が為めなる乎」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

5月24～30日　「悪法師の話説」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、26日を除き、芳宗、芳年の挿絵つきで連載。

＊5月25日　「雑報」　「偽党撲滅論集　過日我党の諸氏が久松座及び横浜の羽衣座にて開かれたる改進党及び三菱会社攻撃の演説を筆記し題名の如き書冊に仕立松江堂より出板するよし委細は広告にあり」

5月26～31日　「海坊主退治の相談」全四回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

5月29日、6月1日　「一身を傷くる者と一国を傷くる者と其害何れか大なる」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

5月29～31日　「協立会演説の景況」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。31日は「大塚氏の書面」と題される。

＊5月29日　「雑報」　「錦絵禁止　馬喰町二丁目の絵双紙問屋綱島亀吉方より故大久保内務卿が喰違にての変事を一枚摺の錦絵に仕立て発行せし処ろ出板条例に触たる廉やありけん昨日発売を禁止され猶売残の分と該版木とも没収されました」

5月30、31日　「投身」　＊雑報欄にかぶせ見出し。31日は「お定の痴談」と題される。

＊5月30日　「正誤」　「昨日の紙上錦絵禁止の一項中故大久保内務卿喰違の変事幷びに没収としたるは誤聞にて只板は毀損画は塗抹の上出版主へ下げられたる由なれば此に正誤す」

＊5月31日　「雑報」　「書肆拘引　府下の書林仲間にて二三と屈指さるゝ近来仕出しの芝神明前甘泉堂山中市兵衛（泉市）方へ去る廿七日の朝数名の探偵吏が踏込みまだ臥床にありし主人を起し諸帳簿有金などを取調べの末偽版の廉に付尋問の筋ありとて主人と番頭一人とを其筋へ拘引されしが番頭のみは其日の夕方に放還されたり此偽版事件に就ては多年来迷惑を受け居りし者甚だ多きとかにて被害者連中は不日お調べ済の上如何なる御所分になることかと待ち居る由なれば猶ほ詳細は探訪の上記す所あるべしと時事新報に見ゆ」

「提灯持　石川利之氏著の万国亀鑑巻之一は神田美土代町の万国亀鑑社より滑稽和合人の二編は巌々堂より忠臣蔵偏痴気論（故式亭三馬遺著）は通四丁目の珍々堂より何れも此程発兌になりたり」

「広告」　「稗史小説合巻物の著述及校正幷に諸引札広告類の作文都々一端唄の批点等お望み次第御依頼に応ず／居／所／芝日蔭町壱／丁目壱番地／絵入自由／新聞社内　渡辺文京」

6月2～5日　「政党の趣意書は薬舗の看板と同じきか」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊6月2日　「雑報」　「官報　は弥々昨日より発刊せられしが噂の如く八枚十六面摺なり聞くところに拠れば是れは試みの為めに三十日間ほども摺立てらるゝものにて発売はせられざるよし尤も当分のうち説明は記載せられざるとの事なり」

＊6月3日　「雑報」　「新刊稗史　いろは新聞の続話に掲たる大坂の侠客小鉄の伝記を外題もそのまゝ「性質は会津鍛錬は三条長脇差小鉄利刀」と題し孤蝶園主わかな粋兄の編輯で絵入の美本を馬喰町三丁目の井上茂兵衛

方より出板先に芝新桜田町の春陽堂から出板した同じ様な合巻とは比較にはならぬ上等の美本です」

6月6、7日　「武相同志遊船会」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊6月6日　「雑報」　「官報　同報発行の上は此迄各府県及び郡区役所戸町役場等にて地方税を以て買上来りし民間の各新聞は悉皆廃止さるゝ事に定められし由」

「提灯持　伊藤専三氏編輯大蘇芳年氏画図の新編都草紙の初編が本石町の著述堂より三品藺渓氏著の操の一節は愛善社より発売になりました」

「写真早取　浅草公園地の写真師江崎礼二氏が過般外国より買入たる写真早取器械は何でも瞬く間に写取る実に稀代の器械なる由は当時の紙上に記載したるが去三日隅田川にて催されたる端船競漕の図及び水雷火の爆発せし所を上下二段に写し取り同氏も思たより□□く出来殊に日本へは始めて舶来の器械ゆゑ右の写真を聖上のお手許へ献納いたしたき旨昨日宮内省へ出願されたり此写真早取術は日本にて始めての美術なれば頗ふる世評を博せしと云」

6月7、8日　「信用の説」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

6月7～24日　「少年洋行」全九回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。24日は挿絵つき。

6月8～17日　「誤殺」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳年の挿絵つきで連載。14日から「お米の話説」と改題される。

6月9、10日　「改進党の新聞紙初音を囀づる」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊6月10日　「雑報」　「新刊書籍　日本橋区通旅籠町の万巻楼より出版になりたる石村貞一氏著の明治新刻国史略は開闢の昔より今日までの事跡をいと精密に綴りしものにて殊に至便の書なれば購読者頗ぶる多く已に第

三版になりたり」

6月12～14日　「新富座大演説会」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

6月13～17日　「吾人の厄運」全五回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊6月13日　「雑報」「出板　元大坂町の法木書肆より露国プシキン原著高須治助氏訳述の露国奇聞花心蝶思録と題する小説本が出板又た本町の柳河書林より古書講義の第四号が発売になれり」

＊6月15日　「雑報」「出版　簿記用習字本は京橋区元数寄屋町の林徳太郎方より八犬伝第四輯より七輯までは稗史出版会社より復讐晴霧嶋といふ雑賀柳香氏著の小本は麹町の開進堂より何れも此の程出版になりたり」

6月19、20日　「社会に対するの義務を論ず　榊英美」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

6月19、20日　「君子の争論」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊6月19日　「雑報」「軍談取締　近来大坂市中に開講する軍談講釈師の内には折節現今の事に引当て民権を説き自由を談じ政談がましき事をする者あり且夫等の席へは例も聴衆は大入にて謹聴〳〵否々など呼び拍手喝采することも往々あるやにて大坂警察本署にては大に懸念せられ近々夫等の取締法を一層厳重に設けらるゝ都合なりとか是では夫の佐倉宗五郎伏見の文殊九助が伝などは以来読む事も聞く事も停止られはせぬかと或講釈好きの心配話し」

6月21、22日　「我党と供に進んとする者は誰乎」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

6月21～29日　「安南事件の原由」全六回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

＊6月21日　「雑報」「新聞の功能　之を大にしては政治の改良を謀り人民の自由権利を伸張し国利民福を得んことを勉め之を小にしては善を勧め悪を懲し無知の人民を誘導するの責を以て任とする新聞屋の本色」（トは

生意気な言種だが）を知らず一度紙上に記載るや否自分の悪事醜行は棚へ上げ三百代言の煽動に乗り突然新聞屋を告訴して損害要償とか名誉恢復とか大業に威し掛て内済金を貪らんと企て或は赤い役衣を着せてやるなど躁ぎ散す者が多い中に感ずべき話あり（略）」

6月22、23日　「女の刃傷」　＊雑報欄にかぶせ見出し、挿絵つき。

6月23～26日　「板垣総理帰朝の景況」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

6月23、26日　「青天白日」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊6月23日　「雑報」「大部の書籍　古今未曾有海内無比とも謂つべき非常に大部なる書籍は古今図書集成にやあらん此書は清国康熙年間初めて廷臣に命じて筆を採らせ隴正年間に至りて漸やく功を終へしものにて冊数総て五千二十冊斯る大部の書籍なればさしもに広き清国にても僅か六十部を出版したるのみにて直ちに解版せしかば後は只名ばかり聞えて其書を見しもの絶てなき程なれば今度上海新報社中の点石斉主人が発起となり予約出版に附するよし」

6月24日～7月12日　「嗚呼改進党はよ偽党なる乎　在京　山本作平」全一六回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

6月24～27日　「芸妓の情死」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。24日末尾に「記者云歌吉が詞の中吉坊云々とあるは仮に弟と称する歌吉が私生の子吉太郎（十）の事にして是等の事情は去三月中の当新聞（四日続）に記載しあれば彼是見合せ御覧あるべし」と付言され、27日末尾にも「因に曰該情死一件を例の伊東橋塘氏が得意の艶筆を揮ひ「日本橋浮名歌妓」と題し日ならず一小美冊を著す由なれば委曲き事を知たいお方は此小冊に就て見給へと歌吉の亡霊の為め又一つには橋塘氏の為め今から来月の盆提灯を持つこと爾り」と付言さ

れる。

＊6月24日　「雑報」「新刊書籍　芝宇田川町の書林伯悦堂内野弥平次方より予約出版成島柳北氏閲伊達邦成土生柳平両氏校水滸伝は原唐本の誤謬を訂し銅板にて鮮明に彫めたる小冊なれば小説家たる者の坐右に欠べからざる珍書にして其第一回分四冊と女庭訓手習鑑全一冊（再板）を昨日出版したり又四書講義巻之一を巌々堂より小学教員生徒必携試験問題集の上編と経世新論一冊を千葉県千葉本町の立真社より出版したり」

6月28、29日　「支那人革命を企だつ」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

6月30日～7月4日　「荊の露」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、7月1、4日は芳年の挿絵つきで連載。4日末尾に「以下次号」とあるが、続稿は確認できない。9月15日の雑報末尾に「記者曰す　過般二三回掲載したる「荊の露」は受持記者病気に付暫くお預り「夏野の刺草」脱稿しだい引続て書続ますれば看客左様娯承知あれかし」とある。

6月30日、7月1日　「娼妓の自害」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

7月1、4日　「仏兵の再敗」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊7月1日　「雑報」「提灯持　時事新話明治乗合船は五軒町の今古堂より山川幸喜氏著の虎列刺病忍耐療法治験略記一冊は宝健堂より出版になりました」

＊7月3日　「雑報」「新聞社申合　兼て東京諸新聞申し合せの上広告ありし新聞代価前金の一条は愈よ本月一日実行するの約束なるに付去月廿八日各社会計掛の人々集会し種々相談を遂げ向後は時々相会して会計上の利害得失を協議し諸事処分する積なり」

「神戸新報　同新報は去月十六日発行停止を申し付けられしが去月二十八日解停になれり其の日神戸警察署よ

り持主を呼び出し先に発行停止の際に押し支へたる新聞紙（第八百四十六号）を残らず下げ戻されしが同新聞紙の社説欄内は濃き墨にて悉く抹塗（けし）てありしと」

7月3～5日　「大塚成吉様」　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。4日から「大塚成吉様の話」と題される。

＊7月4日　「雑報」「風説　何者の徒戯にや近来大坂地方にては弊社の画工芳年が当地に来り絵入新聞を発兒するとか甚はだしきは既に芳年は当地に滞在して新聞発兒に尽力いたし居るなど頻に言触す者ある由なるが右は先頃まで土佐の土陽新聞に従事して居た年延氏の間違なるべく芳年は依然として日々弊社に出勤致し居りますれば大方の諸君かゝる浮説を信じ玉ふな兎角山師連が少しの事を大業に言触し尻に尾のなき弥次馬連が騒ぎ立るには困つたもの」

「新刊稗史　伊東橋塘氏著大蘇芳年氏の挿画「花春時相政」と題する明治の侠客箔屋町の相政老人の伝を面白く綴たる前編一冊を例の滑稽堂より明治八笑人は京橋加賀町の由己社より出板」

＊7月5日　「雑報」「提灯持　元大坂町の法木方より「小夜千鳥浪の音信」と云ふ当時流行の合巻を出板せり」

7月6～29日　「明治天一坊」全一六回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。22、25、27、29日は付録に掲載する。

＊7月6日　「雑報」「東海新聞　愛知県下名古屋愛知新聞社にて発兒したる愛知新聞は本月一日より東海新聞と改題し紙幅を広め発刊に成たり其体裁は時事新報に異ならず東海第一の大新聞紙なるべし」

7月7、10日　「清国上海通信」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊7月7日　「雑報」「日本出版会社　兼て諸新聞の広告にもありし通り今回同社より第壱回出版の書籍（仏国ロヅルム著藤田四郎重訳英国憲法史論上巻の上、米国ノーマン著小林営智訳政治汎論第一巻上、仏国ユー著曾田愛三郎訳欧羅巴革命史第一巻）が発兒になりしが右は巻首に著者の小伝を記し且つ其の憲法史には英国

憲法の保有せる種々の勢力及び民法刑法の通観の事項を毎章細論し又た其の汎論には政治法律の本義及び政府の必要政治の目的及び其範囲等の事を詳論し又た其の革命史には羅馬西帝国信襲よりシヤンマンの治世に初り仏国革命の起因より拿破翁第一世敗亡に逮ふ迄の記事を密記したる右各書とも近来無比の良訳書なり尚ほ第二回出版中には仏国ルーソー著中江篤介訳の非開化論等の良書あれば其の出版の日を俟つべし」

＊7月8日　「雑報」「坂崎斌氏　馬鹿林鈍翁の芸名を以て民権講釈を興行し其筋の忌諱に触れて久しく獄舎の窓に呻吟し居られし高知の坂崎斌氏は此程満期にて出獄せられたり」

「虚無党新聞　去月四日露西亞の首京聖御得よりの電報に虚無党は「人民の意思」と題する新聞を今度新に発行したる由なり」

＊7月8日　社主兼印刷人　松田脇知郎／編輯兼印刷長　柏井繁馬となる。

7月10～22日　「桜間要三郎公判」全一一回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。22日は付録に掲載する。

＊7月10日　「雑報」「挑灯持　曲亭馬琴の椿説弓張月前後合本四冊は昨日南伝馬町の稗史出版会社より出版せられたり」

＊7月12日　「雑報」　「全世界一大奇書　は予て前号へ記た通滝山町の報告社より巻の一を出板せり現に面白き小説也」

7月13～15日　「桜間要三郎無罪放免せらる」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

7月14、15日　「白浪五人男」　＊雑報欄にかぶせ見出し。15日は挿絵つき。

7月14～19日　「奇遇」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し、15日を除き、芳宗の挿絵つきで連載。

＊7月15日　「雑報」　「東洋民権百家伝　我国にて往昔より真正の民権家と云ふは人皆な佐倉の木内宗五郎氏一

人を称し他に之れに匹敵す民権家之に勝さる自由家の幾百人ある事を知らず社友小室信介氏夙に之を憂へて数年間此等民権自由家の湮滅したる跡を捜索し之を西洋民権百家伝に擬して不日東洋民権百家伝と云を発兒せらるゝ由其第一帙は紀州の戸谷新右衛門涌井荘五郎文殊九助氏等都合十五名なりといふ」

「右慶承事件の雑話　過日名古屋裁判所に於て吟味中なる松平良七（慶承）の事件は明治天一坊或は今天一坊と評判し稀有の一珍事なるより裁判を傍聴せんと詰掛る者日々山の如くにて毎朝三時頃にはや二三百人も門前に押掛けることゆゑ其雑沓いはん方なく殆んど腕力無理押しにて捻込む様子なれば門番人の持てあましは勿論其傍聴を望む者も大に困却せるより先日傍聴人より方法を立て最初門前へ到着せし者が順々に名札を集め満員の上は後れて来る者を立帰らしむることにせしと又同地大須の戯場宝生座にては此頃講談師松崎小龍玉が慶承の事を演ぜしにより「偽葵噂紙彦」と題し不日開場するよしまた俳優等は右事件の開庭初日より一日も缺かず傍聴に出かけて其言語動作までも目を注け公判落着の上は「実録傍聴葵裁判」といふ外題を以て新守座にて興行するといふ（略）」

7月17、18日　「情の勢力」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。18日は「未完」とあるが、続稿は確認できない。

7月19～21日　「事物を判断するの法」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊7月20日　「雑報」　「絵入自由出板社　今般弊社内へ題名の如き一社を設け新聞編輯の余暇政事学術百科の書籍洋の東西を問ず苟くも世益ありと認る者は之を飜訳和解して通俗文に綴成し挿画を加へ製本を美にし務て婦女童幼に読易く解易からしめ民権自由の何物たるを知しめんため専ら筆田墨耕下等田地の開墾に従事せんとす依て第一回出板の書目は（勤王済民高峯の荒鷲）（通俗社会論）（高等法院傍聴筆記付河野広中君略伝）

何も近日出板又第二回は（亞非利加内地三十五日間空中旅行）と題し英人シールス、ベルネ氏原著に係る学術上不測の小説を洋学者井上勤氏の訳述せし者を出板致しますれば陸続御愛顧を乞ふと雑報央で一寸と娯披露」

「提灯持　嘗て写真師北庭筑波氏が撮影せられたる板垣総理の肖像を今度竹川町の楠山秀太郎氏が石版画に写して昨日より発兌されたり」

7月21～9月16日　「高等法院傍聴筆記」全五〇回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。25、29日、9月1日は付録に掲載。21、31日、8月1、8、9、11、22、23、26、28、30、31日、9月1、2日は、芳宗の挿絵つきで連載。福島事件。

7月22～29日　「末摘花」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。28日は挿絵つき。

＊7月22日　「雑報」　「政談禁止　過日々本橋区芳町の自由亭にて学術演説を開かれたる奥宮健之氏は昨廿一日其筋より東京府下に於て公衆に対し政治に関する講談論議を禁止されたり尤も学術演説は差支なき由」

7月24、25日　「高等法院の公判を傍聴して感あり」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊7月24日　「雑報」　「昨今種沢山に付き当分の内付録を添て毎日勉強」

7月27日～8月1日　「夢に華胥国に遊ぶ」全五回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊7月27日　「雑報」　「提灯持　神田一ツ橋通りの松江堂より抱腹奇談と云ふ小冊が出版」

7月28、29日　「尻を追ふ」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊7月28日　「雑報」　「高等法院公判傍聴筆記　予て諸新聞に広告したる高等法院公判傍聴筆記付河野広中君小伝は本日其第一編を出板したり一読せは福島事件の起因より高等法院の公判に附せられし事の顚末を詳細に

知了し併せて広中君の小伝をさへ附したれば何人に限らず必読すべきの良書なり」

7月31日、8月1日　「濠州通信」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

7月31日、8月1日　「コイツハ猫だ」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊7月31日　「雑報」　「新刊稗史　土屋郁之介氏訂正芝定四郎氏編輯の「誠忠義伝」（故岩倉公の伝）及び雑賀柳香氏補綴の「汗血千里駒」（坂本龍馬君の伝）を南伝馬町壱丁目の摂陽堂より出板せり何も面白い稗史」

8月2～4日　「労役社会の境遇は果して如何」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊8月2日　「雑報」　「浄瑠璃本禁止　従来坊間に行なはるゝ院本うちには聞に堪られぬ猥褻淫奔の文句ありて風俗を紊乱（みだ）す媒介となること少なからざれば自今右等の全部を禁止せられんとて目下其の筋にてお調中」

＊8月4日　「雑報」　「出板　高等法院公判傍聴筆記の第二編を絵入自由出板社より本日出板せり当編には河野広中氏が郷関を出るの日自由の為幾干の苦楚を嘗るを予期し妻を去り子を捨て母に別れて恩愛の覊（きづな）を絶ち大義親を滅するの有様を巧みに写出せし図及び高等法院の細図をさへに挿入したり」

8月4、5日　「お気が付れたか」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

8月5、7日　「駿馬痴漢を乗せて走る」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月5日　「雑報」　「出版　岩倉公言行録と内幕想誌一篇権妻内幕は九春社より英国憲法史要は浜町の鳥居正功氏方より又茨木お瀧白糸と云絵入読本を芝浜松町の伊勢勝より何れも此程出版になりたり」

＊8月7日　「雑報」　「出板　井上勤氏訳述渡辺義方氏校正の「全世界一大奇書」第二編を瀧山町の報告社より出板一大奇書の名に恥ぬ現に面白き小説なり又森谷重次郎氏抄訳の通俗婚姻性理も池の端の競英堂より出板」

8月8、9日　「施政者の妙術」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月8日　「雑報」　「出版　通り四丁目の珍々堂より故田螺金魚作の契情買虎の巻と故式亭三馬作の滑稽絵入一杯奇言と云ふ面白き小冊を翻刻出版又宇田川町の柏悦堂より水滸伝の第二帙を出板せり」

＊8月9日　「雑報」　「提灯持　京橋区南鍋町の玄々堂より出板したる岩倉公略伝は石版絵の肖像入り又小夜千鳥浪の音信後篇を元大坂町の法木より出版せり」

8月10～12日　「政治の思想養成せざる可からず　淡州　鳥井生　寄稿」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊8月10日　「雑報」　「新聞紙は玩弄物に非ず　近来或傍訓新聞を閲するに該記者は余程利た風流の半可通と見え指物屋が熱に浮されたか仕立屋が反物を裁損つた様に一切寸法違の寸法詞を併べ而して知己朋友の内事を訐き針を認て棒となし所謂楽屋落の悪洒落沢山福井の温泉と云ば福井町の温泉より外にないと心得御当人にも解るか解らざる猫筆（めう）を揮ひ寥（すこ）うゲスとか恐れヤスと勉て文辞を卑うし旧時の悪刷然たる猫不可思議の記体（かきぶり）を模し意気揚々自ら以て得たりとするは記者面白の看客困せばがな沙汰と謂ざるを得ず元来新聞紙は記者の玩弄物に非ず彼新聞紙は如何に売ざるも如何に刷高の少なき三四千の花主はあるべし然に其花主には更に解せざる記者一個の悪洒落を併て貴重の紙面を填るとは苦々しくも恥しからずや迥に聞該社長は如才なき人物だと云に斯る小事に汲々たるばかな記者に該紙面を濫用され恬として顧みざるは抑々亦如何なる訳ぞ譬へ果敢なき小新聞にもせよ世の風潮に従つて筆の運を高尚の点に進ませ勉強せねば磨墨同様段々と跡へ年を取ますぞよと人の疝気を頭痛に病む余計那御苦労さんより投書のまゝ」

＊8月11日　「雑報」　「新趣向　彼の自由童子と称して京都大津間に通俗演説をなす川上音次郎氏が去る一日より一週間大津四の宮の劇場にて昔譚を興行せしに非常の大入にて常に五六百の聴衆ありしと然るに奇と称す

べきは木戸の入口に莚樽数箇を積みあげ墨黒々と「酒は飲みしだい肴は喰ひ次第」と書たる張札を下げ木戸内には民権酒と書し木標を建て傍らに樽の鏡を抜いて自由に飲むことを許し又雑肴を山の如く積み上て勝手次第に喰はしめ其の后傍聴席に就しむる新趣向なりと云ふ」

8月14、15日　「天下最も恐るべき者は何乎」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月14日　「雑報」　「出板　福島事件高等法院公判傍聴筆記の第三編を絵入自由出板社より昨日出板此編には河野広中氏の縛に就く図及び田母野秀顕氏が暴客に狙撃に逢ふの図を加へ頗る美麗の小冊なり」

8月16、17日　「貴賤の別を論ず　横浜　紫香女史　寄稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月16日　「雑報」　「絵入自由出板社発兌書籍　当新聞にて先日御高評に預りました「高峰の荒鷲」を前後二冊の美本に仕立て前編一冊は昨日売出しまた「高等法院公判傍聴筆記」は殊の外喝采を得一二三編共既に売切たれば昨今再板中尚四編よりは引続出板花香恭次郎君の小伝も聞得たれは次編より掲載すべし」

8月17日～12月16日　「夏野の刺草」全九三段　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。12月11日末尾に「記者云す本話思ひの外に事実繁く短かき筆の丈延て逐々回を重ね来つ定めて看倦玉はんが本年中に局を結び又立返るあら玉の春より新奇の種を蒔換へ筆の田を耕しますれば今暫くの御辛抱を偏に願ひ侍るになん」と付言され、16日には「附て云該話は絵入自由出版社にて例の絵入美本に仕立て開化新説聖代の球謡と題し最面白く綴換へ来春の新板物として売出升れば偏に御愛顧を願ふになん」と付言される。

＊8月19日　「雑報」　「出板　絵入自由出板社より高等法院公判傍聴筆記の第四編を出板せり本編には河野広中君の肖像ありて体裁よき必要の良書なり同く第一二三編再板の分は不日出板するとのことなり」

8月21、22日　「政党の働力如何」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月23日　「雑報」　「奥宮健吉氏　去る十九日の夜より来る三十日まで日本橋芳町の寄席自由亭にて興行する講談は本職の講釈師松林右円等五六名に今度新たに講釈師の鑑札を受けたる芸名森林黒猿本姓奥宮健吉氏にして氏が初日よりの読物は高等法院傍聴筆記幷びに三菱会社内幕話開化の由来等なりと云ふ」

＊8月24日　「雑報」　「演義日本外史　第一巻（平氏の記）を南鍋町の兎屋より発兌せり該書は松村操先生の著に係り事実明瞭体裁よき美本なり（略）」

8月26～29日　「政事に関する稗史小説の必要なるを論ず」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

「（略）凡そ人民の自由中言論出版の二自由は最も貴重にして且つ其の消長によりて大に国家の安危存亡に影響を及ぼすものにして他の自由に先んじて之が保障を為さゞるべからざるは論なきなり抑も言論出版の二者は社会の文化を進め人民の知徳を増し且つ施政の方針を定めむるものにして社会一日も欠ぐべからざるものなれば必ず其の自由を与へざるべからず倘し或は此の二者を塞ひで而して国家の安全を計らんとする時は是れ猶ほ枯木に培ひて其の花の見其の実を結ばん事を期するが如し豈に得べきの理あらんや之れを是れ察せずして言論出版の二自由を与ふる事を吝（やぶさか）らんと欲する者あらば其の人や必ず愛国者にあらざるなり（略）夫れ言論出版の二自由の全からざるが故に政理の人心に感通せざる場合に於ては已を得ず変通の策を以てせざるべからざるなり其の変通の策とは何ぞや則ち稗史小説の力を仮る是れ也」

「抑も稗史小説の人心を感動するの大なるや盖し其の性情に適切の刺衝を与へ易きが故なるべしと信ず殊に中人以下婦女子に至るまで之れを聴き之れを視て以て解するに苦しむが如き憂なく直ちに了得して而して其効果を見るを得べきなり（略）人或は云はん稗史小説は元と児戯のみ何ぞ之れを以て政治の改良を計るの機器とするに足らんや況んや改革家を以て自ら任ずる志士仁人に於てをや豈に此の如き瑣細の手段によるべけん

やと余輩之れに応へて云はんとす彼ノ婁騒のナルシースと題する演劇院本の如き唯だ纔かに音楽の改良を為せしに止まりしと云ふを得べき乎焉んぞ知らん其の結果は仏国多年の君主制を廃棄せしのみならず勉めて欧州陸地の抑制束縛を解き而して人民の自由を発達せしめしにあらずや其の他古今欧米諸邦の小説家にして往々学者社会の上に傑出超群せし有名の大家は殆んど僂視するに遑あらず是れ余輩の贅言を俟ずして少しく海外の事情に通ずる者の業に已に熟知する所なり現時仏国に於て雷名を轟かしたる小説家の巨擘ヒューゴー氏の如きは世人評して仏国は即ち同氏なりと云ふに至り其の功績名誉は実に旭日の東天に冲るが如し小説家にして斯の如し嗚呼亦た盛なりと云ふべきなり」

「我国古昔の事は邈矣今より是れを稽ふべからず夫の中古武断政治の行はれし時代は措て問はず近く徳川政府三百有余年間の政事社会に徴するに言論出版の二自由は元より毫もある事なく只だ僅かに写本筆記の類に属するものありて其の上木して以て広く世間に公にせしものは蓋し甚だ少なし畢竟するに人民をして政治の是非得失を論議批評するを許さゞりしに由りて然るものならん彼の頼山陽の日本外史を見るも徳川氏の事を記する其の最も意を致せるの深きを知るに足るべし凡そ史家の事を記するに当りてや特書直筆して以て一刀両断の明決を下すべき事は董狐を俟つて而して後に知らざるなり然るに其の特書直筆する事能はずして或は北条氏の事に托し或は足利氏の蹟に擬して暗々陰々の裡に於て徳川氏の事を記する者は当時の状態実に止むを得ざるの事情ありしならんと雖も亦た応に洪嘆すべきの極にあらずや其他寓言に漫筆に千種万様の変則法を用ひ滑稽諧謔の間に於て痛く時政を諷刺せしもの挙げて数ふるに遑あらざるなり之れに由りて考ふるも徳川政府の言論出版の二自由を束制せし事の厳なりしを測り知るに足るべし／夫れ我国に於て小説家と称すべき者一にして足らざるべしと雖も盖し曲亭馬琴を以て近世の一大家となすべく其他式亭三馬風来山人蜀山人山

東京伝十返舎一九等の有名家ありと雖も概ね戯作を事とせり就中風来山人蜀山人の如きは当時の政治を嘲りて之れを諷刺せし著書少なからず余輩以謂く今日と雖も小説家なきにしもあらざるべきに未だ馬琴或は風来蜀山に及はざる事遠矣と是れ抑も如何なる原由ありて然るか政学の益々闡明するに従つて政事に関する稗史小説の萎靡して振はざるは洵に憂ふべきの一にあらずや／斯く論じ来らば政治社会に於て之れに関する稗史小説の必要なる所以と言論出版の二自由の全からざる時代に於ては特に此の変通の策に由るにあらざれば決して一般人民の政事思想を培養する事能はざる理由を明らかならしめたりと信ず倘し夫れ今日に於てフレデリツキ大王其人の如きありと雖もテンシン夫人其人の如きありと雖も幹図（かんと）の思想と婁騒の卓識あるあるにあらずんば奈何ぞ輙すく社会の上進を希図すべけんや況んや今日の状況未だ政事に関する稗史小説の洪益ある事を知らざる者あるに於てをや豈に与（とも）に真正の政治を談ずるに足らんや余輩固より浅学菲才なりと雖も業（すで）に已に斯の事を以て自ら任じ盟（ちか）つて稗史小説の力によりて世の所謂下等の蕪田を開拓せんと期す仍て此の篇を述べて以て稗史小説の必要を説き併せて其の盛ならん事を祈ると云爾」

＊8月28日　「雑報」　「出板　全世界一大奇書第三編絵本真田三代記第三編釈迦八相倭文庫第一編は滝山町の報告社より「新夏祭劇俤」と題する狂言合巻は神田花房町の聖橋軒より出板何れも美事の書冊です」

8月30日～9月4日　「顔と心は雪と墨」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

＊8月30日　「雑報」　「出版　両国吉川町の松木平吉方より冥府狆談といふ面白き滑稽の絵入美本を出版せり」

8月30日～9月18日　「中島座」　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。31日から「中島座筋書」と題される。

8月31日、9月2日　「政を論ず　淡州　鳥井生　寄稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊8月31日　「雑報」　「講談師への口達　近来講談師を雑へたる通俗演舌の流行する故にてもあるか昨日講談師

の頭取南龍貞山燕尾文車の四名を其筋へ召喚せられ可成政談ヶ間敷事杯を演述せぬ様との意味で懇々諭達ありしと又府下中の寄席営業者へも同様の口達ありし」

「東洋民権百家伝　一名日本義人伝の初帙三冊が此程発兌になりしが本書は案外堂主人即ち小室信介氏の編輯に係り篇中十有五名の伝を詳細周密に穿鑿して同氏が得意の快筆を以て多年の刻苦を経漸く成りしものなれば一字一涙一句一嘆実に多読に堪へず転々感慨の情を発せしめ為めに怯夫惰民をして憤起せしむるに足るのみならず真に東洋卑屈人民の頑眠を攪破すべきの良書にして苟くも志士たる者の必読坐右を欠くべからざるの書なり」

9月2～6日　「高等法院裁判言渡書」全四回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

9月2～9日　「恋の闇」全五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。9月12日「正誤」欄で「本紙第二百三十二号より同じ三十九号まで恋の闇と題して書載たる前後五回の雑報は事実無根の由に付其の全部を取消す」と取り消される。

＊9月2日　「雑報」　「出板　高等法院公判傍聴筆記の第六編は本日出板したり該書は愛国の志士は素より日本国民たる者の必読すべき者なれば非常の売高にて既に三版まで出板せり尚引続き七編は来る四日出板の筈也」

＊9月4日　「雑報」末尾　「記者曰す　本日は雑報の都合に依り続物はお預り」

9月5、6日　「時事に感あり　石塚南郊　寄稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月5、6日　「不幸の姉妹」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊9月5日　「雑報」　「出板　松村操氏の「水滸伝講義」第一号を神田佐久間町二丁目の松村より柳條亭花彦氏の編集「雨夜語宇都谷峠」と云新富座の狂言合巻が本石町一丁目の東洲屋より出板になりました」

＊9月7日　「雑報」　「出板　高等法院傍聴筆記第七編を昨日我絵入自由出板社より出板したり本編よりは河野広中氏以下六名の裁判言渡書を掲載したれば前編より引続き是非とも講読すべきの書なりまた「人に嫌はるゝ種」夫婦の後悔「交際及び対話の注意」と称する三冊の小冊子は南鍋町の兎屋より出版いづれも面白く為になる本です」

9月8、9日　「男女豈に参政権を異にせんや　茨木　畊華女史稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月11、12日　「行為に非ざれば人を感動するに足らず」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月11日～11月21日　「五月雨日記」全五九冊　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。

＊9月11日　「雑報」　「脱党　大石正巳、馬場辰猪、末広重恭の三氏は此程自由党を脱せられたり右に付末広氏は追て井生村楼の国友会演舌会にて自由党に対する三氏の履歴と今や脱党して別に独立党を立ざる可らざる理由を演説せらるゝ由」

「出板　高等法院傍聴筆記第八編及び「高峯の荒鷲」後編の二冊を絵入自由出版社より昨日出板せり高峯の荒鷲は是にて満尾頗る美本ですヨまた東都仙洞余譚は例の九春社より発兌せり」

9月13、14日　「誤なければ迷なし」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月15、16日　「利害の説　志築近眼生　稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊9月15日　「雑報」　「自由講談　今夜より浅草広小路の寄席浅草亭に於て開講する自由講談へは先醒堂覚明（奥宮健之氏）森林黒猿（奥宮健吉氏）其他五六名の講師達が出席せられて西洋新小説物幷に東洋民権百家伝等何も耳新しき自由講談を為らるゝとの事なれば定て大入を占るならん又日本橋通二丁目の若松亭にて同連中が興行し来し分は　皇女薨去にて暫時停業し居たりしが同く今夜より開講するとの事」

「出板　当新聞にて先々娯評判に預りました浜の松風拾遺湖水の口碑上編一冊を絵入自由出版社より出板しました面白い稗史ゆゑ皆さん購て下才また内田弥一郎氏訳博物全志の内動物篇三冊を喰馬(ママ)町の島村利助方より松田勝太郎氏編輯の近世露国変乱実記は南極閣より何も此程出版したり」

9月18、19日　「他人の思想を察る法ある歟」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊9月18日　「雑報」　「自由講談　雄弁卓舌を以て其名を世上に知られたる演説家奥宮健之氏事芸名先醒亭覚明は今晩より日本橋通二丁目の寄席若松亭に於て開講読物は今回絵入自由出板社より出板の西洋学術小説物空中旅行及び全世界一大奇書幷に高等法院公判傍聴筆記にて其他二三の自由講談師も出席するとの事」

「出板　高等法院公判傍聴筆記第十編を本日発兌せり尚引続後編発兌十五編迄にて満尾本月中には全部一括の良本となし後年の参考書となるやう出板するとの事故誰に限らず必読すべきの良書なり又日本衣服裁縫の栞（上下二巻）は日本橋通三丁目の福山より日本忠臣蔵の美談を英語に訳したる「テイルス、オフ、オー、ルドジャツパン」と題する横文字の絵入稗史を神田錦町の十字屋方より出板」

＊9月19日　「雑報」　「卅五日間空中旅行　本書は予て広告したる如く西洋有名の小説家ヂユールスペルネ氏の原著にして井上勤氏の訳述に成り弊社員渡辺義方の校正に係り其第壱編（毎編石版密画入）を本日発兌せり其大要は古来亞非利加内地の実況を捜んと企図る者陸続踵を接すと雖も皆野蛮猛獣の為に噬殺され身を全ふして帰り来し者なきを以て欧州人の之を遺憾とする数百年爰に英国の学士中二人の大胆者あり多年の勉強空しからず学術の力に依て自由自在に空中を飛翔る新奇不測(ふしぎ)の工夫を発明し辛くも身を全ふして亞非利加内地の実況を探得たるの顚末を詳記せし西洋有名の学術小説なり而して其空中旅行の間九死を出て一生を得一生を得て九死に瀕し種々の艱難辛苦を経歴し看官をして或は喜ばしめ或は怖れしめ其精神をして千変万化せし

む繙きて其虚飾ならざるを知りたまへ」

9月20、21日　「英国は自由の破壊者にあらざる乎」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

9月20～22日　「雨後の月」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

9月25～27日　「末広重恭氏に質す」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊9月25日　「雑報」　「出板　故土藩坂本龍馬君の伝汗血千里駒第二編は雑賀柳香氏が補綴にて南伝馬町一丁目の摂陽堂から発売り該書は尋常の小説体に書綴あれど実に明治更新の起因を知る小歴史とも謂つべき良書なり当編は龍馬君が薩長の間に周旋するより細君鞆子女丈夫の段をも掲たり又高等法院公判傍聴筆記第十二編は絵入自由出板社より釈迦八相倭文庫第二編は報告社より故古松簡二君の遺著愛国正議は通三丁目の丸善よりいづれも昨日出板したり」

＊9月26日　「雑報」　「発売禁止　神田須田町廿五番地原胤昭方より出版になつた天福六家撰と題する六枚続きの絵草紙は昨日其筋より発売を禁止し併せて版木を没収する旨達せられたり」

「出板　浅草東三筋町の徳盛館より開智新書第一編を通四丁目の金桜堂より「絵入倭文範」（小本一冊）を横山町の辻文より「福嶋奇聞自由夜語」前編一冊を出板せり何れも面白い書籍です」

9月28、29日　「之を好者と之を楽者との別　淡州　鳥井生　寄稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊9月28日　「雑報」　「出板　高等法院公判傍聴筆記第十三編を絵入自由出板社より出板当編にて満尾せり一体十五編まで出板満尾の積なりしが看官の便利を謀り編数を縮め十五編分を十三編に纏たるなれば苟くも公判事件に関する事実は毫厘も洩すことなく一見して福島事件の詳細及び高等法院裁判の顚末を知に足る実に有用有益の良書なり」

＊9月29日　「雑報」　「伊勢音頭　今度新富座にては二番目狂言へ伊勢音頭を出すに付て救合社中より四十名の芸妓を抜摘つて彼古市のヨーイヤサを踊つて貰ふ事に極つたとの事は前号へも記るしたが偖て近々稽古に取掛るに付いて其筋へ届を出すと劇場へ出勤する以上は芸者で御座れ師匠であれ仕打は女俳優同様なれば俳優鑑札を請ひ受く可し左もなくば彼等と打混じ踏舞を演ずる義相成ずとて届書を却下せられたさうだが其後何と相談は極つたか」

9月29、30日　「感心な男」　＊雑報欄にかぶせ見出し。30日は「上坂平四郎の美談」と題される。また30日末尾には「因に云此程絵入自由出板社より出板したる公判傍聴筆記には河野氏の写真に依て描たる肖像及び外五氏の肖像の挿入あれば平四郎の篤志を愛で其望の一分にも充んと同社より右傍聴筆記を平四郎の許へ逓送たり」と付言される。

10月2～4日　「児戯政党の出没」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

10月2、3日　「鴉片騒の確報」　＊雑報欄にかぶせ見出し。2日は他の記事を跨いで分載。

10月2～4日　「高等法院傍聴筆記」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。2日は付録にも掲載。

10月4、5日　「裁判宣告」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊10月4日　「雑報」　「講談禁止　此程講談師の群に入て諸方の寄席へ出勤さるゝ森林黒猿事奥宮健吉と先醒堂覚明事奥宮健之の両氏は昨日其筋へ召喚の上自今軍談講釈営業禁止の旨を申渡されしよし」

10月5～7日　「留守預」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

10月6、7日　「学問と良心との関係　在栃木　小口生稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊10月6日　「雑報」　「北門新聞　今度函館自由党幹事長山本忠礼氏を始め有志の人々が相謀りて北門新聞とい

ふ題号の一大新聞を此地に発行せんとて作今計画中のよし今其の規則書を見るに主意は自由の真理を拡張し社会の改良を計るを以て目的とし本社を函館に置き支社を福山江差小樽札幌根室に設け資本金は二万円と予定し之を四千株に分ち一株五円として全国の有志者より漸次に募集する筈なりと」

10月9、10日　「無罪放免」　＊雑報欄にかぶせ見出し。10日は「裁判言渡書」と題される。

10月10～13日　「晩秋書感　三田寓　桑村寥洲稿」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊10月11日　「雑報」　「百華園遺稿　活溌有為の精神を懐ながら北邙一片の煙と消し社友故桜田百衛氏の著述に係る自由の錦袍と題する冊子は兼て出板に着手中なりしが愈近日銀座四丁目の柳心堂より発兌になる由」

「提灯持　英国の学士西基斯比耶氏原著井上勤氏訳の人肉質入裁判と題せる一小冊は例の今古堂より此程出板になりました」

＊10月12日　「雑報」　「出板　仏国医博士ジヱー、ジー、ウイツトコースキ氏原著英国医学士パルフレー氏英訳日本安藤正胤丸山仙二郎重訳の人身剪形剖体図解婦人生殖器の部大図一折図解一冊共通三丁目の丸善より発兌また矢野駿男氏訳述の政治思想従政自由論及び政治思想政体原論の両冊は金剛堂より又大坂の宇田川文海氏校閲旭亭芳峰画の夢の手枕は京都の駸々堂より何れも此程発兌になりました尤も夢の手枕は弊社内絵入自由出版社にて大取次いたしますれば殊に御評判の程隅から隅までずいと」

＊10月13日　「雑報」　「出板差止　神奈川県平民大久保幸吉出板の過去現在未来倭美談と題する小冊子は詮議の次第ありとて昨日其筋より出板を差止られたり」

＊10月14日　「雑報」　「道徳の頽廃　斯る果敢なき書物を読む人のあるこそ歎はしき次第なれど或人が何やらの序に書れたる如く近来文運日に月に進歩し三尺の児童は云も更なり糊売婆ア人力車夫に至るまで聊か文字を

解し得て傍訓新聞の雑報位は容易く読下すに至る之を昔時の文盲に比すれば頗る進歩したるが如きも退いて考ふれば善を勧め悪を懲すとか只に因果応報の理を説き好で怪談異説を伝へ僅に終身学の灯提持に類する現に果敢なき冊子物語を面白しとて世の人に珍重さるゝはまだ〳〵文運の隆盛処か漸く其入口に足を踏掛たる位のものにて具眼の人より視る時は如何にも嘆はしき次第なるべし苟くも操觚の責に任ずる者は常に此心得なかるべからず然るに近来出来星の書肆傍訓新聞に掲載したる珍談奇話の世に持囃さるゝを奇貨として文を剽み画を取り利慾に眼闇黒の恥輝しく記者画工に其過誤の訂正も請はず世に公けにせらるゝは実に難有迷惑恐縮の至にて苦々しき次第なり元来板権のなきものなれば誰人に出板されたとて決して彼是言ふべき理なきは法律も問はざる処なるゆゑどうでも宜とは言ものゝ一応の断り位はあつてもよさうなものだと愚痴を飜すもたはい〳〵」

＊10月16日　「雑報」　「朝陽社　夙に横浜野毛山に於て太陽を撮影れしより写真術に長ぜしとの名声を輝かされし二見朝隈氏は先年銀坐二丁目に一大写真場を起し尋て朝陽社を設立し写真新報なる冊子を刊行し専ら斯道の進歩を促がされしが未だ十分ならざるを以て曩に社員小川一真氏を米国ボストン府に派し同国有名の写真師ハス、チグス氏の許に留学せしめ切に苦心せらるゝは遍く世人の知る所なるが這回小川氏も業を修めて目出度帰朝したるに際しハス、チグス氏と約束を結び写真器械薬品等販売の業を開き孰も実験精撰して外人より不良品を買冠る如き宿弊を救はんとの熱心より該商店を同所に新築し一昨日其開業式を江東中村楼に挙行され弊社員渡辺義方も其招待に預かりて席末を汚せし朝隈氏とは断金の交誼あるを以て同氏に代り該社の趣意を演説とは行ぬ例のお饒舌を致し升た」

10月18～21日　「人心の変遷」全四回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊10月18日　「雑報」　「錦絵の売出　例の滑稽堂より今度売出しになつた根津大松葉楼全盛競三枚続の錦絵は弊社の芳年が筆にて出来も至極立派なれば相変らず御評判御求の程偏へに願ひまするとは板元の仮声」

＊10月20日　「雑報」　「千里駒　予て記せし故坂本龍馬君の伝三編は南伝馬町摂陽堂から発刊当編には同君及び中岡慎太郎君が刺客の為に斃るゝ眼目の大団円」

10月20、21日　「之を慎む色に在り」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊10月21日　「雑報」　「新聞雑誌売捌同盟組合　昨日の広告欄内にも見えたる如く府下並に横浜等の新聞雑誌売捌所廿九名には今度同盟して一の組合を立て代金の取立法及び営業上の便益を協議決定せしと云ふ」

「解党　山形県なる荘内自由党は去る十三日の同地新聞に解党する旨を広告せり又浅野乾氏も自由党を退ぞかれたり」

「自由の錦袍　同書は兼て諸新聞の広告にもありし通り故桜田百衛氏の遺稿にして自由の愛すべく民権の貴ぶべきを烈士貞婦の艶話に擬し主（もつ）ぱら寓意を以つて最と閑雅秀麗綴りたるものなれば婦女童幼諸君には誠に読み易き良書なるが此程銀座四丁目の柳旦堂より発兌になりたり」

10月23～25日　「詭激なる政論の現出は必ず其由来あり　在神田　茨木童子」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

10月23、25日　「因果覿面」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊10月24日　「雑報」　「才子必読吃驚草紙　の上編は昨日絵入自由出板社より出板せり該書は寛政以降の文人墨

客学士画工其他有名の人々の言論著書揮毫技術及び其行為に就き一々論難駁撃したる者にして其論活溌其説卓絶著書の誰たるを知らず永く世に埋没ゐたるを社友島崎鴻南氏の編纂に成り弊社の渡辺文京之を校す而て小説の沿革歴史則ち幕政の頃矢鱈に言論出板の自由を検束したる等の事蹟をも付記したれば寔に才子必読の名に背うかぬ通俗絵入の美本なり」

10月24、25日　「新富座略評」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

10月27～30日　「劇場に於て寒心す　半狂手稿」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

10月27、28日　「賢妻」　＊雑報欄にかぶせ見出し。27日は挿絵つき。28日は「筆女」と題される。

10月27、28日　「破獄」　＊雑報欄にかぶせ見出し。28日は「破獄騒」と題される。

＊10月28日　「雑報」　「脱党の流行　末広氏等が発明と云ふ訳でもあるまいが改進党の鳩山和夫氏も亦た例の脱党」

「提灯持　若菜貞爾氏編輯「稲葉猴雪燈新話」前後二冊は両国薬研堀町の三友社より「実々事譚」巻の六は南鍋町の兎屋より出板何も中々面白い本です又徳盛館より開智新書の第二編を発兒又忠義水滸伝の巻六は芝露月町の看可楽堂より発兒せり」

＊10月30日　「雑報」　「金沢急報　本月廿五日其の第一編を出板の筈なりし同地の自由新論は出版間もなく皆引揚られ同社員久保田常吉氏は拘留せられたる旨急報ありたり委細は後報に報道すべし」

10月31日～11月2日　「象山書翰の写」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出し。11月1日は「佐久間象山書翰の写」と題される。2日は「以下次号」とあるが、続稿は確認できない。

11月1～18日　「政治思想養成の策　在東京　矢野猶山稿」全一五回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊11月2日　「雑報」　「空中旅行　此程絵入自由出版社より其第二編を発兌したる亞非利加内地三十五日空中旅行と題する西洋の小説は其原則を学術に取り悉く実験上より綴たるものなれば空中旅行と題するものから決して架空の談に非ず学術進歩の今日に当り実に有用の小説なれば甲乙を論ぜず必読すべきは勿論なるが今此空中旅行を現に行ひたる新談あり外国新聞に云く仏国人ジョビ氏は其助手リオン及び一新聞記者と倶に去る八月二十五日前八時風船アルバトロス号に乗組み地中海を超えんとて風向きに任せてコルシカへ志したるに地中海上にて該風船次第に落ち降りてあはや三人は果敢なく此処に生命を失はんばかりなりしが三人は必死を極めて船中の装置糧食を悉皆海中に投棄し重量を軽めたるに依り再び上昇して九千尺の高さに達しけり折から烈風吹起り一時間九十英里の速力を以て伊太里の方へ吹付けつ翌廿六日の九時に同国フレスシヤ近傍なるタスカン山の嶺に落付きしかば土地の人民は厚く之を待遇したりとなり発程の地より此所までの距離を算すれば千二百英里以上なりといふ亦速かなる旅行にあらずやかゝる奇怪の旅行に付き尚其詳細をしらんと欲せば空中旅行の一書に就て見られよ」

「出版　西村玄道氏著通俗愛国論全幷びに吉本義秋氏著の新珍奇聞自由美譚全は時事出版社より発兌になりたり」

11月4日　「色界の迷津」　＊末尾に「後の話は続いて明日記載すべし」とあるが、続稿を確認できない。

＊11月4日　「雑報」　「全世界一大奇書　同書は原名「アラビヤンナイト」と呼び西洋有名の一大小説なるが井上勤氏の飜訳に係り弊社の渡辺義方が校正に成り瀧山町の書林報告堂より第五の巻まで出板になり尚依田学海先生の序文を加へ西洋綴美麗の合本（第一巻より五巻迄）に仕立て此程発兌たれば何も競ふて購読あるべし」

＊11月6日　「雑報」　「学生退校　二百余人暴行に関してといへばソラ又兇徒聚衆の事件にては無きかと言はん人もあるべけれど此れは是れ此度東京大学生徒の暴行に関せし処分の一件にして一昨二日右生徒の文学医学両部の少許を除くの外大むね退校を申付られたる次第を聞くに去月二十七日学位授与式執行の節消閑の行楽に共々日暮の里へ散歩せんと各一壺の酒を携へて彼の地へ赴きたるに誰が用意し置きけん下物は左まで多からざるも酒樽山の如く堆積しありければ是は思ひ寄らざる天賜なりイデヤ傾日の饑腸を療せんと牛飲も啻ならず愉快に傾けたるが門限あればとて一同サツと引揚げ午後五時頃寄宿舎へ帰り各喫飯し了れば酔気勃々禁ずる能はす遂に前後を忘却して校用の機械器具をあまた損傷し剰さへ鎮静の為め出で来りし教師役員等に対し粗暴の所為に及びしかば警部巡査等出張ありて事漸くをさまりたりと雖も捨て置くべきことにあらねば翌廿八日より同校に於て暴行生徒の審問はじまりぬ然るに前に記するが如きの次第にて誰れ首唱するとなく一同遊歩に出掛け期せずして一大宴会となりたる事なれば我こそ首唱者なれと自首するものゝみにて孰れが真成の首唱者なる歟更に判然たらざれば僅に数人を罰するのみにて事の治まるべきにあらず去れば暴行のありし翌日より本月一日まで同校役員等には殆ど毎日徹夜の有様にて評議ありし末同日夜半過ぎより翌二日の早旦に掛け生徒保証人の許へ急使を発し二日午前七時までに相違なく出頭すべしとのこと故然ることありしとは夢にも知らぬ保証人は何事ならんと朝まだきに何れも該校へ詰めかけたれば同所の混雑は言はん方なく一旦先方へ領収られし名刺の紛失して再び徴求せられしも多かりぬ頓がて保証人を順次呼出しになりて生徒への御達を渡されたり或る予備門の生徒の退学申渡たしを聞くに左の如し／去月廿七日の暴行に関し候に付退校申付候事　右の次第に付保証せし生徒を即刻引取り且つ生徒の予て当校より拝借居候物品は漏れなく返納せしむべし乃ち右御達に対し請書を出すべしとのことに付保証人は一々同校にて調製し置かれたる請書の末

尾に生徒及び保証人の名を署し捺印して一同退り出たるは午後一時比にてもありしといふ仄かに承はれば総理加藤弘之氏にも進退伺を差出されしとか又同校は昨今殆ど閉校の姿なりと聞く去れば同校に取りては是までの世話甲斐なく生徒に在りては功一簣を欠くの憾なき能はず実に双方の不幸と申すの外無し又同日文部卿より左の通り御達あり定めて深き御注意あることの様思はる／第十八号　府県／当省直轄官立学校学生生徒及公立学校生徒中不都合の行為ありて退学せしめたる者は其事情に因り当省直轄官立学校及府県公立私立の学校に入校することを禁ずべし此旨相達候事／但本文の処分を要するときは其族籍姓名事由を具して当省に申出べし／明治十六年十一月二日　文部卿福岡孝弟」11月7日に「一昨六日の雑報大学生徒退学記事の冒頭二百余名とあるは百四十五名の誤り又同記事中東京大学総理加藤弘之氏にも進退伺ひを差出されしとか記せしは無根の説に付取消」と正誤される。27、28日の官令欄に処分学生氏名を掲載。28日雑報に「大学の模様過般退学を命ぜられし東京大学の生徒等は再入学を許さるゝや否やの義に付き目今其筋にて評議中のよし聞く処にては生徒中にも追々再入学を歎願するもの多く既に願書は受理されしといひ又た同校の重なる所にては直に再入学を許すべしとの論もあり只穏当に事を理（おさ）めんと尽力さるゝ人もあり何にもせよ来年一月が入学の期節なれば其砌り何とか沙汰もあるべしと心待に待ち居る生徒もあり又何故にや教員中に近頃辞職を願はるゝ向もありて既に聞届られしものもあり兎に角目下の処にては退学生徒処分一件に付ては議論三派に分れ居る趣きに風聞すれども真偽は果して如何あるべきや」とある。

「松林伯円　軍談師松林伯円の夙に開化講談を演ずるは人の知る所なるが今度小室信介氏が編輯の東洋民権百家伝の中に就て重立たる民権家の伝記を潤飾増補して追次に開演する趣きなるが去る二日の夜より両国広小路の福本席に於て右百家伝中小堀家の一条即ち文殊九助等の伝記を演ずるよし定めて痛快悲壮の新講談なる

べし」

11月8、10日　「人々を啖ふ」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊11月11日　「雑報」　「出板　酔多道士の戯書「東京妓情」上中下三冊は通り旅籠町の東生亀治郎方より出板東京の妓風を叙述されたる実に風流才子必読の珍書なり」

＊11月15日　「雑報」　「綴暦（とじこよみ）　大小年暦の儀は従来綴暦柱暦等の別ありて皆な其筋へ届済の上は何人に限らず売買し来りし処ろ右綴暦に限り来明治十七年より以前の如く神宮の御祓と共に全国へ配付さるゝ事に定められしを以て以来絵双紙店等にて売捌く事を差止めらるゝとぞ」

11月16、17日　「成果（なれのはて）」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊11月16日　「雑報」　「出板　矢野文雄氏著訳書読法全一冊は薬研堀町の報知社より馬琴翁叢書第一輯（自第十七冊至第二十冊大尾）は例の兎屋より発兌」

＊11月18日　「雑報」　「提灯持　仮名垣魯文編著の当世芸者歌舞伎は昨日神田一ツ橋通りの松江堂より出板」

11月20、21日　「人殺」　＊雑報欄にかぶせ見出し。21日は挿絵つき。

11月21、22日　「先づ己れを知れ」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊11月16日　「雑報」　「出板　古学通弁全一冊は著名の国学家故水原宗梁翁の著に係り翁の男宗芝氏の註せられたるを檜物町の加藤正七方より昔語古物会全一冊は春風居士松村操氏の戯著にして例の兎屋より三嶋中洲氏著小図南録全一冊は中橋下槙町の商弘所よりいづれも此程出板になれり」

11月22日～3月14日　「枯野の田鶴」全八五回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。22日冒頭に「左に掲題（かゝげいだ）す一条の話説は縡天保年間に起り本年八月に至り其局を結ぶの長譚なれど忠義孝貞の善人あれば姦

悪邪曲の兇徒あり喜怒哀楽交交生じ終に勧善懲悪の大団円まで有為転変を編述す看客幸ひに流行の戯作物と見過つ事なく意を記者が筆に注ぎて深く通暁所あれ」と付言される。

11月27～29日　「時機は宜く作るべし俟べからず　和田稲積　演説」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊11月28日　「雑報」　「書籍発兌　柏悦堂より予て締約出版の第五才子書金聖歎批評水滸伝第三回分九より十二迄刻成り発兌せらる右は前版に譲らず紙質版面とも完全の美本にして来年一月よりは正価にて発売する由」

11月30日～12月8日　「輿論の出所」全八回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

＊12月1日　「雑報」　「鹿鳴館　此程開館式を行ひたる内山下町の鹿鳴館は明治十四年の始め頃より外務省の監督にて建築に着手し此程漸く落成したり総建坪四百余坪にして二階造りの煉瓦家なり庭廻はりなども最と手広く清雅鮮麗愛すべし日比谷の練兵場より東に望むときは此館巍然として高く聳え甚だ壮観なり此館は懇親会合のクラブ或は賓客接待等の用に供するものにして西洋風の芝紅葉館兼ホテルともいふべき様のものなり正面の楼上に踏舞室あり其左右に客間あり楼下の東側に食堂あり楼下の西側北の極端に球突部屋あり其他寝室応接所湯殿等を合せ部屋の数総て四十余あり館内の装飾美を尽し工夫を尽し申分なし建築の費用は最初十万円位の見込なりしが追々に増して落成までには十四万円余に上りたりといふ」

＊12月4日　「雑報」　「出版　通俗無上政法論全一冊は三十間堀町の絵入自由出版社より発兌になれり該書は自由党総理板垣退助君の立案により植木枝盛君の記述になり和田稲積君の編輯俗解されしものにして古今東西学士の未だ曾て唱論せざる卓説高論にして其の要領は万国共議政府を設け宇内無上政法を立つるにあらざれば人類社会の真正なる自由幸福をば得る事能はざる所以の理由を痛論詳説し且つ国権と民権との密接なる関

係をも詳細に陳弁したるものなれば苟くも政事思想を養成せんとする者は殊に一読せざるべからざる良書なり」

＊12月5日　「雑報」　「又退社　朝野新聞社員中にて錚々の聞へありし長瀬登喜雄氏は先頃中立党の事に付き末広氏と激論の上即日蹶然として退社されし由は兼て聞き及びしが此程又矢部新作氏も何か思ふとろ(ママ)ありて同社を退かれたるよし又々聞く所によれば高橋基一氏も此の両氏と同じく退社されしとか斯く同社員の続々退社さるゝは同社に取りてはお気の毒千万同様なものゝ様なもの」

「出板　浜の松風拾遺湖水の口碑下編を絵入自由出版社より出板是にて満尾せり芳年氏の密画入にて製本も印刷も最も美麗の小説なり」

12月6～16日　「故田母野秀顕氏の履歴」全九回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。20日雑報に「故田母野氏　同氏の履歴は数日間紙上に記載し来りたれど既に広告欄内にもある如く氏の履歴は肖像入の小冊子となりて芝西堂より発兌になり弊社にても其売捌をいたせば二重に記載するも気が利ず殊に種沢山の折なれば已後紙上へは記載を見合す事と極たれば尚ほ御所望のお方は冊子を買て御覧なさる」と断られる。

＊12月7日　「雑報」　「人の屁を嗅ぎ名を売の弊　何処の国の事か知らねど或都府の一小新聞は独立することの出来ざるより同名の大新聞へ泣付き甘じて牛尾となりビク〳〵生命を繋で居るより其仲間の小新聞に同く親分の大新聞と同名の盛んなる独立小新聞あるを見て是も大方己と同じ親分のお庇で生て居るのだらうと飛だ迷惑な卑屈根性を起し只他新聞の盛大なるを羨み親分殿の意を迎て罵詈讒謗の筆を揮ふとか他の新聞に出た事を丸取にするとか余計なお世話をヤキモキと噪ぎ立るも道理なるかな該小新聞の局長殿は更に無見識無志操の誤人物にて常に人の庇に依て其名を売に孜々汲々人の考へ付たことを賛成すると云ば体よく聞えるが其

実薩摩芋を喰過た持れ屁を嗅ぎ意気揚々自から以て得たりと為し生涯雞の口となること能はざる哀れ果敢なきお人ゆゑ何を饒舌も何も書も札付となつて誰一人搆手なく此小新聞の論敵となる者は馬鹿者なりとて世の識者に却つて嘲笑を招くといふが可笑な新聞も有たものだ」

12月9～12日　「他愛心は必ず自愛心より生ず　在東京　楢山迂史稿」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

12月12～20日　「高等法院公判傍聴筆記」全八回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。15、19日は付録にも掲載。高田事件。

＊12月12日　「雑報」　「予約増員　先頃も記載したる耕香館画賸（瀧和亭先生の密画）は七百部を限り予約刊行の筈の処ろ陸続申し込人多く七百部のみにては到底需用に応じ難きに付き尚五百部を限り増刷なす由委細は広告を看られよ右販売幷びに予約とも弊社内絵入自由出版社にて取扱ひ升れば御申し込次第規則書見本共直に進呈すべし」

12月13～16日　「国会は希望すべし又た希望すべからず」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

12月13、14日　「再会奇聞」　＊雑報欄にかぶせ見出し。

＊12月15日　「雑報」　「高橋基一氏　同氏が朝野新聞を退ぞかれし由は既に前号に記載せしが都合ありて国友会をも脱せられたりと断然新聞紙上へ広告せられたり」

12月18～21日　「所刑」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。20日から「高等法院裁判言渡書」と題される。

12月18、19日　「残酷」　＊雑報欄にかぶせ見出し。19日は「お仙の話説」と題される。

12月18～4月15日　「襤褸の錦繡」全九一回　＊雑報欄にかぶせ見出し、芳宗の挿絵つきで連載。2月29日は挿

絵二枚を掲載する。

12月19、20日　「専制政体論　在東京　桑村寥洲稿」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

＊12月19日　「雑報」　「出版　袖珍通俗刑法治罪法訓解は横山町の内田方より英文絵入平井権八小紫譚は錦町の十字屋方より敷嶋文庫噂の橘全一冊は芳譚雑誌愛善社より何づれも此のほど出版になりたり」

12月20日～1月15日　「二世高橋お伝の履歴」全一六回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。28日は挿絵つき。

＊12月21日　「雑報」　「開化講談　来る廿一日より廿三日まで三日間神田連雀町の白梅亭に於て開化講談師と聞えある松林伯円が曩に小室信介氏の編輯せられたる有名の東洋民権百家伝及び新編大和錦を講演する由尤も百家伝は戸谷新右衛門氏の伝記を演ずると云へば当日の大入は屹度請合です」

12月23日　「国権を拡張するの計策果して如何　北豆　函谷逸人」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで「未完」とあるが、続稿を確認できない。

12月23～26日　「二十八年目の復讐」全三回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

12月25～27日　「人は何故に働く乎」全三回　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出しで連載。

12月26～1月10日　「強盗の張本」全八回　＊雑報欄にかぶせ見出しで連載。

＊12月26日　「社告　弊社発兌絵入自由新聞の儀一昨明治十五年第九月一日第一号発兌早々発行停止の厳命を蒙り旬日を経て解停の間もなく又候誤つて法網に触れ七々四十九日の間其発行を停止されたり一度ならず再度まで紙苦尻たるにも拘はらず幸ひに江湖諸君の御愛顧を辱けなふし爾来筆鋒鈍り復前日の勇壮活溌に似ずなどゝお叱ある方も中にはあれど是は新聞子の新聞子たる筆鋒をお読判之なき劇場で申す切落の見物同前とんと歯牙に掛ず拮据勉強致せし甲斐ありて発兌紙数日に月に増加し社運ます〳〵隆盛に赴き候段国家の為め自

由の為め新聞子の為め社員一同難有奉存候就ては来明治十七年一月四日の初刷には例に依て密画入り世界有用の大付録を添へ猶探訪員数名を増し各地方に通信者を置き精々新しき確実有用の上種を撰び論説雑報続話挿画等紙上一切念に念を入れ一層紙面の改良に従事し社員一同奮発勉強仕つり候間猶一層御愛読の程偏に奉希上候先は御歳暮の御挨拶かた〴〵社の為め口條社用に御座候」

12月28、29日　「明治十六年の引導」　＊「絵入自由新聞」欄に別行見出し。

12月28、29日　「親子の強賊」　＊雑報欄にかぶせ見出し。28日は挿絵つき。

＊12月29日　「雑報」　「出版　忠勇美談栗原百助の伝前編一冊は人形町通りの武田平治方より出版」

「社員旅行　弊社の渡辺義方（花笠文京）は本日より来春一月二日迄都合五日間新聞休刊の間を偸んで新聞種取に因ある兎狩兼新聞売弘めのため埼玉県下へ旅行致し升れば辱知諸君へ暫しのお別れ何れ初刷の紙上に於てゆる〴〵お目もじ仕つり升」

（付記）本研究は、平成十七、十八年度科学研究費補助金基盤研究（C）、「新聞小説の生成過程についての包括的な調査研究」による研究成果の一部である。なお「絵入自由新聞」の複写版は、学習院大学人文科学研究所プロジェクト「幕末・明治期と文学」（十川信介氏代表）で提供されたものを使用した。記して、感謝の意を表したい。